

ブックマン著

世界を再造する

MRA運動の道

相馬雪香・西山千訳

毎日新聞社

フランク N.D. ブックマン

世界を再造する

相馬雪香・西山千訳

FRANK N.D. BUCHMAN

REMAKING
THE WORLD



M R A 運 動 創 始 者
フ ラ ン ク ・ ブ ッ ク マ ン 博 士



(上)

一九四九年M R A大会の行われたスイス、

コーの「山の家」遠望

(下)

六月四日の同大会会場風景



は し が き

人類が今日ほど心の底から安全の保障を求めた時代は曾てなかつた。憎しみから、恐怖から、貪慾から直ちに解放される世界の誕生を、人々は切實に希求している。かかるとき、絶對的純潔絶對的無私、絶對的正直、絶對的愛の四つの條件に基く道徳的再武裝の生活を提唱、それによつて世界の平和に貢献せんとするM R A運動が、遼原の火のごとく世界各國に波及し、世紀の秩序の根源としての大きい働きを収めていることは、蓋し一つの壯觀である。

第十一回M R A運動世界大會は、その創始者、米人宣教師フランク・ブクマン博士の七十一回目の誕生日に當る一九四九年六月四日から、スイスのジュネーヴ湖畔コーで開催され、世界八十餘カ國の代表者八千名が參集、わが國からも片山元首相夫妻を初め十八氏が參加した。

平和を愛する民主日本の建設は、高い道徳的基礎の上に打ち樹てられねばならない。本社は崇高なるM R A運動の、わが國における推進の一助として、ここにこの運動の創始者ブクマン博士のライフ・ワークの一つたる「世界を再造する」(Remaking the World)を翻譯刊行する次第

は し が き

人類が今日ほど心の底から安全の保障を求めた時代は曾てなかつた。憎しみから、恐怖から、貪慾から直ちに解放される世界の誕生を、人々は切實に希求している。かかるとき、絶對的純潔絶對的無私、絶對的正直、絶對的愛の四つの條件に基く道徳的再武裝の生活を提唱、それによつて世界の平和に貢献せんとするM R A運動が、遼原の火のごとく世界各國に波及し、世紀の秩序の根源としての大きい働きを収めていることは、蓋し一つの壯觀である。

第十一回M R A運動世界大會は、その創始者、米人宣教師フランク・ブックマン博士の七十一回目の誕生日に當る一九四九年六月四日から、スイスのジュネーヴ湖畔コーで開催され、世界八十餘カ國の代表者八千名が參集、わが國からも片山元首相夫妻を初め十八氏が參加した。

平和を愛する民主日本の建設は、高い道徳的基礎の上に打ち樹てられねばならない。本社は崇高なるM R A運動の、わが國における推進の一助として、ここにこの運動の創始者ブックマン博士のライフ・ワークの一つたる「世界を再造する」(Remaking the World)を翻譯刊行する次第

である

本書はブックマン博士が、一九二一年この運動を始め、ついに今日に見る國際的な精神運動にまで成長するにいたつたM R A運動の長い輝かしい歴史であり、この運動とともに歩んだ博士の苦闘の自叙傳でもある。本書が新しい民主日本の建設のために大きい役割を果すことを切望する。

昭和二十五年一月

毎日新聞社

目次

フランク・ブックマンについて……………アラン・ソーニル……五

I

オックスフォード・グループ……………二六

——キリスト教的革命——

目ざめよアメリカ！……………二九

神はアメリカを支配するであろうか……………三五

革命を癒やすための革命……………四二

II

M R A の發足	五三
<small>リウアイウアル レウオリユーシヨン ルネツサンズ</small> 宗教昂揚、革命、復興	五九
爲政者の型	七〇
秤をかたむける一事	八五
勞働界への精神的遺産	八九
全米記者クラブへの報告	九六
— 英國における M R A への反響について —	
眞のアメリカの脊骨	一〇三
新しい世界の豫告編	一〇九

新武器をつくらねばならぬ	一二四
忘れられた要素	一一八
世界の危機に答える世界哲理	一二三

IV

アイディアの戦い	一四〇
善い道	一五三
危機に對する答	一六七
すべての主義 <small>イデオロギイ</small> に對する答	一七六
——物質主義 <small>マテリアリズム</small> をも含めて——	
答はあ	一九二

裝幀

河野
麻
思

フランク・ブックマンについて

アラン・ソーンヒル

フランク・ブックマンは、なだらかに起伏するペンシルヴェニア州のみどりの丘陵の間に立つていた。そこは彼が生れ、成長した田舎で、両親の墓もあり、また彼自身もいつかは永い眠りにつきたいと考えている場所なのである。強い感激にとらえられて、彼は長いこと一言も發せず、そこに立つていたが、やがて靜かに、「私は何という奇しき導きをうけて來たことだろう！」と幾度か繰り返すのであつた。

この人物の生涯と事業を説明しようとするものは多い。そして、それらの人々によつて愛と忠誠を表わす言葉は、同時に憎悪と偏見を表わす言葉も、殆んど使いつくされたといつてよい。

ところが、彼の生涯に對する彼自身の結語は、不思議にもそれらの言葉には何のかかわりもない。ただ、いつも變らぬ「私は何という奇しき導きをうけて來たことだろう！」という言葉だけなのだ。

そうした言葉を無造作に、自然に用いるこの人は、第二十世紀の潮流の眞只中に生きているのである。彼は人類を愛するが、それは抽象的人類ではない。汽車で乗り合やす人間といった極めて具體的なものである。例えば彼は世界の大抵な都會の中のどこに居をかまえても、あたかもそこに半世を送つたかのような氣安さをもつて生活し、友人の間に出入することができる。大小如何なる家庭に入ろうが、うちくつろぐことができる。彼は生を愛する。彼にとつて生は人だからである。彼は愉快なことをたのしむとともに、苦痛を轉じてよい收穫にする。極めて單純な日常の食事から、歴史を形づくる大事件にいたるまで、一つとして彼にとつて飽くまでも玩味すべく、體驗とすべく、利用すべき何ものかでないものはない。すべて、より大きい計畫の中に織り込まるべき何ものかでないものはない。

彼は時代の人である、と同時に彼ほど時代に横溢する諸傾向に對して旺盛につきかかつて來た

ものはない。大量物質主義の時代にあつて、彼は人を物よりも上位におこうとして戦つて来た。自己欲求の個人主義時代にあつて、彼は自己没却のチーム・ワークの有効なことを事實の上に示して来た。無神的獨裁制の時代にあつて、彼はデモクラシーのキリスト教的戦闘精神を再び燃え上らせたのである。

彼の業績を十分に了解するには、何はさておき、次の二つのことを頭においてかかる必要がある。第一は、了解の鍵は理論よりも體驗の中に發見されるべきであるということである。その體驗が、この年月の間に如何ように花を開き、實を結んだかにいたつては、本書の讀者は自ら判斷することができるであろう。第二の點は、フランタ・ブックマンにとつては親しくキリストについて知り得たところのものは、大切にたたんで祕藏すべきものではなく、他の人々のために利用すべきものであるということである。「キリストについての體驗を失わないようにする最善の方法は、それを人から人へと渡してゆくことである」と彼はいう。しかもどこの國においても無數の大衆が精神的實在を渴望しつつ、ある世界にあつては、そうすることの有効性には限度はないと彼は考へてゐるのである。

フランク・ブックマンに賦與された天資の中には、自分の周圍にいる個々の人々に全幅の心をもつて接する一方において、諸種の國家および世界全體の必要とするところを見失うことがないという減多に見られない能力がある。しかも、その一つに對する答は、やがて他方に對する答にもなるのである。あるとき、聖オーガスチンは、自分の心の内における精神革命という奇蹟を體驗してからは、いろいろの奇蹟を信するのになんとも困難を覺えなかつたといつたが、フランク・ブックマンにとつても、彼を變化せしめた力が世界をも變化せしめ得ることに一點の疑いもなかつた。

かようにして、革命多き時代にあつて、彼は一層大きな革命を育んで來た。その革命こそは根本的に、建設的に人間の心を整備することによつて他のすべての革命に先行し、かつそれらに答えるものである。諸種のイデオロギーが横行する時代にあつて、彼は一つのイデオロギーに不可抗の表現を與えた。そのイデオロギーは、人間性の中に横たわる最も深い必要に答えるものであるがために、人間性に劣らないほど普遍的であり、そしてその故に、引き裂かれ、分斷された現世界に、結合をもたらすべき唯一の希望を提供するものである。

オックスフォード・グループおよびM R A運動の創始者は一八七八年六月四日ペンシルヴェニア州のペンズバークに生れた。彼の家族は、代々自由愛好を播籃として育てられた人々であつた。今を去ること二百年前、彼の祖先はスイスの聖ガレンの地をはなれて、若々しいペンシルヴェニア州に自由と機会とを求めたのであつた。こぎれいに整頓された農家と陽氣な色にぬられた厩舎、掃除のゆきとどいた臺所、眞心こめてしつらえられた教會堂と墓地をもつところの、儉約にして富裕なペンシルヴェニア・ダッチと呼ばれる現在の部落群は、血液の内にキリスト教的デモクラシーをもちつつ育てられた過去の世代について物語つてるのである。ここには神を尊崇し、生を愛する人たちが住んでいる。

フランク・ブクマンは今でも友だちをアレントタウンの簡素な、上品な街路を通つて自分の生家へ案内するのが好きである。そこは彼が子供のとき熱心に畫を描いたり、魚釣り遠征を計畫したり、殊に友だちをもてなしたりした處なのである。ブクマン家は昔も人で一ぱいだつたが、

幾年もたつた今日でも、フランクが生家訪問のために歸つて來ると、一、二時間の中には、もう昔の學友だとか隣人たちが詰めかける。フランクが子供のときの話だが、ある日、彼は十二人の少女をダンスに護送したという、その中の一人でもが當日の楽しみにはされることを彼は忍び得なかつたのである。コックのメリーが常にいうことは、「フランクが歸りがけに街で幾人の友だちに會うかがわからない以上、晩飯のお客が幾人になるのかわかるはずはない」というのだつた。

ミューレンバーグ大學を卒業するほどなく、彼はフィラデルフィヤ市の最も貧しい方面に、孤兒や貧兒のためにホームを營んで、そこに住んだ。後年、彼がペンシルヴェニヤ州立大學内のキリスト教事業の指導者に推されたとき、最も熱心に彼を援けた友人の一人はビル・ビツクルという男であつたが、彼は大酒のみの酒類密賣者であつた半生を一變したばかりでなく、ブックマンが學校を去つてからもあとに残つて、長い間歴代の學生に強い感化を與えた人物である。

ブックマンのひととなりも、その業績もみな彼のすべてを捧げて人のためにつくす心から涌き出したものである。「一人々々の人に對して強度の配慮をもて」これがオックスフォードにおける初期の同志に彼が常にいつた言葉である。群衆とか大衆を相手にして個人を無視する種類のキリ

スト教事業には彼は關心はない。「二階の窓から目薬を投げたんでは何の益もない」彼はそういうのである。

私は彼ほど早く、的確に人の心的状態を看とるものに會つたことはない。大勢の人のいる部屋で、彼は特別に援助なり、激勵なり、強い挑戦なり、露骨な警告なりを必要とする人に目星をつけて誤ることがない。また私は何か容易ならぬあやまちのことでこつびどく叱られることを豫期しながら彼の許へ行くと、慈父の温かさで歓迎とをうけ、同じ過失者仲間のもつような完全な了解に接するのであつた。それと反對に、肩をたたいてほめてもらへることを思ひながら行くと、よこッ腹をコツンとこすかれて、成程と氣がつくのであつた。フランク・ブクマンは何人に對しても、豫期したものは滅多に與えない代りに、殆んど常に必要のものを與える。人間了解は貴重の上もない彼の天資であるが、同時にそのために拂つた代價は高價である。彼は私にこんなことをいつた。「私は神さまに人間について超敏感にして下さるようにとお願いしたが、後になつて、ああいう願いをしなければよかつた、と後悔しそふになつたことが一度や二度でない」と。男や女をあるがごとくに知り、しかも彼らが如何にあり得るかを知るといふことは、無

眼の犠牲を要求するところの終生の人間的闘争に身を委ねることを意味するのである。大概の人間が心の中に他人のことをばみすぼらしく描きながら、自分のことについては極めて漠然と意識するにすぎないのを見て、彼はもどかしさに堪えられないのだ。それは机の前の事務員の場合でも、臺所で働くコックの場合でも、國政にたずさわる閣員の場合でも、彼にとつて變りはないのだ。

あるとき、彼はエジンバラ市のある晩餐會で一老婦人のとなりに坐つた。やがて彼女はよい仕事に一生を捧げたので、今は死ぬ支度をするばかりだ、と彼に語つた。「死ぬ支度！」と彼はいつた。「なぜ、これから生き始めないのでですか？」兩大戦の中間期にジュネーヴにおけるオックスフォード・グループと國際連盟の事業のための道を洞察して、その道を聞いていつたものはその婦人であつた。

*

*

*

一九二一年フランク・ブックマンは、軍備縮小會議の代表者たちに會うべく英國代表部の軍事

委員に招かれてワシントンへ行つた。當時連盟規約や連盟などが地球から戦争を一掃してしまふだろうとの一般の希望は高かつたが、しかし彼は、個人の場合に効き目のある性格を變える力が國家にも適用されるのでなければ、何事も成功しないだろうとの信念をもつていた。彼はワシントンへの夜汽車の中で、それまである大學内にもつていた好い職から身を引こうと決心した。それ以來、彼は俸給というものを手にしたこともなければ、人間的地位の安定を得たこともない。

ワシントン滞在三ヵ月後にして、彼は再び英國に歸つた。彼は英國教會の二監督ビショップに招かれていたので、彼は知人とでもなく、従つて前ぶれもされずに英國に渡つたのである。一人また一人と彼は英人に接して友をつくつていつた。彼は當時の懐疑的な、そわそわとした、戦争の創痕に満ちた人々を愛し、またよく了解した。彼は彼らの人生觀を傾聴し、そして彼らに、人間についての眞實の話をした。議論に對して體驗をもつて答えたのだ。主だつた大學生の若干は、彼の周圍に集つた。當局にとつて、問題々であつた多くの人々は、新精神のバイオニヤとなつた。ある大學説教壇からは、オックスフォードにもたらされた光りに對して、公然、感謝の祈りが捧げられた。

そうした初期の數年間、彼の主なる仕事は指導者の選擇と訓練とであつた。いろいろの人が彼の教えをうけに集り、生涯彼の許にとどまつた。キリスト教的な生活について彼がどう考へてゐるかは、彼自身の業績をもつては計られなかつた。それは彼の周圍に集つたものの質と増加ぶりによつて知られた。他の人ならば組織を打ち樹てるところを、彼は有機體の發育に力を注いだ。他の人々が宣言によつて世間に呼びかけているとき、彼は世界を一つの家族として結んでいつた。當時も現在と同じく、彼は何人をも誓約や契約によつて、あるいは財的その他の紐帶によつて自分に結びつけることをしなかつた。何干という人たちは思いやりと眞心という破ることのできなない紐帶によつて、彼にまた相互に結びついた。彼は指令を發しなかつた。各人は親しく神によつて導かれる特典をもつてゐるのである。

彼の事業は一年々々と大きくなり、國から國へと擴まつた。一九二八年には南アローズ獎學金受領學生やオックスフォード在學生の幾人かが南阿に旅行した。彼らは體験的信仰の火に燃える言葉で南阿の人々に語つた。彼らの旅行は南阿における話題となつて、一行は「オックスフォード・グループ」という名を頂戴したのであるが、爾來、その名稱は彼らとともに全世界に行きわ

たるにいたつた。その翌年、さらに大きな團體はブックマン博士自身に率いられてまた南阿を訪れた。それから十二年後の一九四一年、戦争のために南阿には民族的緊迫氣分がまき起されていたにも拘らず、大藏大臣でスマッツ將軍の右腕といわれるヤン・H・ホフマイヤ氏、その他有力な南阿人は、ブックマン博士らの訪問は「全國的意義をもつものであつて、黒人と白人、オランダ人とイギリス人の全國にわたる人種的和解にあずかつて最も大きな、そして根強い影響力を與えた」との意見を發表した。

年がたつにつれて、彼の事業は新しい活動範圍をもつとともに、一層の喫緊性をも帯びるにいたつた。一九三〇年代の初め頃、私は英國特有の金色燦爛たる夏のある日に彼と一緒に歩いたときのことを思い出す。そのとき私たちが通りかかつた古い家々の美しさを讃えると、彼はいきなり口をはさんだ。「そうだ。だが數年たつとこれらの家は跡かたもなくなるよ——我々が變らな
いことには」それを聞いた私は、彼がただ私をおどろかさうとして大袈裟なものいをしてい
のだと思つた。悲劇であつたことは私と同じように考えたものが恐ろしく多かつたことだ。

大西洋上を往つたり來たり、アメリカにカナダに、オランダ、スイス、スカンディナヴィヤに、

その他世界の諸方に彼は旅行した。不斷に働きながら。しかし決して一人では旅しなかつた。

かつては彼が一にぎりほどの僅かな友とともに音もなく訪れた地において、彼は今や幾百、否、幾千という活氣に満ちた、福音をひろめるキリスト教徒を動かしていた。彼は可能的最大の印象を残すために、名將の天才をもつて適宜の場所と適宜の時に精神軍隊を集結して來た。彼とともにあるとき、通常人は異常事をなしとげた。政治家はキリスト教徒のごとくに行動し始め、キリスト教徒は政治家のごとくに行動し始めた。彼は多くの教會指導者に、人口に膾炙した「強大な軍隊のように神の教會は進む」という言葉について全く新しい概念を與えた。

大戦以前の事件に満ちた幾年の間、ブックマンの同志の中で、彼の指導の下に自分らが建設させられつつあつたものの全意義を了解しているものは少なかつた。彼らは大急ぎで靴をととのえては地球上あちらこちらと動いていた。彼らはごたごたした場末の町にも住めば、廣々とした邸宅にも住んだ。大聴衆を相手に演説して、その言葉は多くの國語に翻譯されたりした。ともに働き、ともに旅行した彼らの中には、かつてイースト・ロンドン出身の民衆煽動家も、女王に仕える女官もいたであらう。陸軍の將校たちも労働組合の指導者たちも、悠揚迫らざる東洋式哲學

者も、まだ十代を出ないアメリカ少年たちで一向にみがきのかかつていない騒々しいのもいたであらう。それは一向問題にはならなかつた。彼らは、何れも世界大の家族のメンバーであつた。彼らは階級なき社會であつた。行動しつつかあるキリスト教デモクラシーであつた。彼らは個々になし得る小さなことと、協力して達成し得る素晴らしいこととの相違がわかつていた。多少の苦痛は免れなかつたが、彼らは非常な喜びをもつて眞の協力者たちの魅力と實力とを發見していたのだ。「あれは小さい池に棲む大きな蛙だよ」ある有能な、しかし思い上つた人物をさしてフランク・ブックマンは時々こんなことをいつたが、あるとき彼は急に思いついたように、「オックスフォード・グループは大きな湖水だよ、小羊ががちわたりすることもできれば、象が泳ぎまわることもできるよ」といい足したことがある。

この間たえず、一方において獨裁勢力が地球征服を目指して立ち上りつつあつたとき、フランク・ブックマンの指導下にあつたあらゆる人種、宗教に屬する人々は現實に一つの偉大な、解答となり得るイデオロギーを學び、生き、建設しつつかあつたのである。困り果てた爲政治家たちがデモクラシーを説く間に、ブックマンはデモクラシーを築き上げるべく世界を周行した。國々が一

網打盡的に奴隸化されようとしていたときに、ブツクマンは國を擧げて靈感にふれるようにと働き、かつ戦つた。世界が武器を山と積みつつあつたとき、ブツクマンはそれに劣らない規模の上に道徳的、精神的再武装を實現すべく計畫し、叫んだ。多くの人々がキリスト教だけでは不十分だと嘆き悲しみつつあつたとき、彼は世界大の運動を展開することによつて、「キリスト教に十分の機能あり」との、すべてを包括する眞理を如實に示した。

そうした精神は、米國における法人「M R A」の定款の前書きに反映されている。

富、名聲マタハ休息ハ我々ノ何レニトツテモ連合ノ動機デナカツタ。

我々が學ンデ來タトコロノモノハ、聖靈ニヨツテ啓示サレタ眞理デアツタ。

我々ノ擔保物ハイエス・キリストニオケル神ノ富デアル。

世界大ノ家族トシテノ我々ノ結合ハ、聖靈ノ指導ト、我々ノ相互愛ノ中ニ託サレテアル。

我々ノ喜悅ハ、神ノ指導權ヲ復舊センガタメニ、人ノ心ヲ變化セシメヨウトスル共同闘争カラ生レル。

我々ノ目的ハ、コノ地上ニオイテ、イタル處ノ男女ノ心ト意思ノ内ニ神ノ國ヲ建設スル

ニアル。憎ミナキ、恐レナキ、食リナキ世界ノ建設デアル。

我々ヘノ報賞ハ神意ノ遵奉ニアツク。

戦争になつた。M R Aの人々は何千となくその中にまき込まれた。彼らも他の何百萬という兵士と同じく戦線において、または淋しい前哨地點において汗と血とを提供した。しかし彼らはそれと同時に、それ以上のもの、すなわち特異な訓練の果實をも提供することができた。

その間、國に残つた同志は國內戦線（中略）において汝々として働いた。人間の激情は戦時には昂揚される。その結果として、世界の風向が如何なる性格のものであるかわからなくなることが稀ではない。戦時中フランク・ブックマンとともにあつたものは、彼が如何に確かな洞察力をもつて、目前の危機を透してその前方に横たわる一層大なる問題をつかむこと一再でなかつたかを證言することができる。當時の彼の演説を読むならば、明らかな證據がそこに發見されるであろう。それらの演説は、デモクラシーの興廢は鐵火の鬭争の結果よりも、デモクラシーの本質であるところの道義的、精神的力の總動員にかかつているとの彼の信念を明示しているのである。その總動員が行われてこそ初めてデモクラシーは物質主義のイデオロギー（ベルリンのと、モスクワのと

を問はず)を凌駕して、そして、淨められ高められて、世界の民衆に平和と待望の安定感とを與えることができるであろう。

戦争が終つたとき、M R Aは前よりもはるかに強いものになつていた。その頃、非難や攻撃がなかつたからではない。非難や攻撃が絶えるということはあり得なかつた。フランク・ブクマンの運動は悠々自適していた人たちを不安にするとともに、革命的物質主義の勢力およびその雑多な同盟勢力にも挑戦をたたきつけていたのだから、諸方から反抗の起るのは實状を知つてゐるものには意外でなかつた。ある上級陸軍將校はM R Aが遭遇しつゝあつた反抗の種類を分析したことがあるが、M R Aに食つてかかる點においてはナチも共産主義者も同じであり、政界における極左も極右も、猛烈な無神論者も偏狹な僧侶も同じことで、M R Aは、ある時には軍國主義的と罵られ、ある時には平和主義的だといつて非難された。労働階級のある分子は反組合的だといつて攻撃し、経営者側のある分子は親組合的だといつて攻撃した。件の將校は結論としていつた。「世界的規模で活躍し得る力を包蔵するような道徳的、精神的改革運動なればこそ、このように毒を含み、互いに矛盾し、しかも全世界にわたつて敵意ある反對に會うのは當然である」と。

フランク・ブックマンは好んで批評を買うつもりはなかつたが、賣られた批評の前にはたじろいだことはない。彼の回答はアブラハム・リンカーンのそれであつた。「神が我々に示し給うた正義を堅持しつつ、ただ邁進して着手した仕事を完成しようではないか」批評に對する唯一の決定的回答は彼の畢生の事業の「質」である、というのが彼の信條なのだ。そして歴史の法廷に立つたときには自分も批評家もめいめいの成果によつて裁斷されるであろうから、批評を恐れる必要はないといふのである。もともと聖靈に導かれているのであるから、彼の仕事は精神の源泉から切りはなされることはない。また、それはキリスト教の眞髓であるから、どこへ行こうが抑壓されるといふこともなかつた。過去におけるその記録はそれ自身を辯護するに十分なのだ。今日そういうことよりも重要なことは、我々の行く手に待つてゐる大きな戦いにおけるその戦略的役割を了解するにある。

*

*

*

フランク・ブックマンの仕事で興味のある面の一つは、彼がそのメッセージを發表するにあつた

つて新しい體裁と形式とをどしどし創造し、使用してゆく様子である。十年、廿年前のゆつたりした時代においては「ハウス・パーティー」が行われた。ホテル、大學校、または大きな田舎の邸宅で催された非公式な友人の集いで、ここでは教會の門をくぐつたことのない無数の人たちが、うち寛げる環境の中で實際的な實用的な信仰フェイスを得た。それから後になると、大きな國民的および國際的集會が催され、そこでは本書に載っている演説の多くが成された。大戰初期の危急の時代には圓卓議が試みられて、經營側と勞務側の人々が新しい雰圍氣の内に會合し、古い、感情的になつた問題の處理について新しい道が発見されたことも稀でなかつた。そうした努力が實を結んでついに世界的大會の開催となり、米國ミシガン州のマッキノー島とスイスのコーにある訓練センターとなつたのである。

大概の人は仕事を自分の才能に合わせて發展させようとする弱點をもつている。ところがブツクマンは他の人がよりよく仕事をできるように感動を興えるという行き方である。最近、彼は以前のように澤山の演説をしなくなつたが、その必要もなくなつたのである。今や全世界にわたつて彼の訓練した澤山のチームは書籍や、演劇や、映畫やその他いろいろの手段をとおして、個人

をも國民をもキリスト教的イデオロギーにひきつけつつあるのである。

今日、彼は十代の青少年男女をとおして米國の青年層に呼びかけている。それらの若者どもは彼とともに米大陸を縦横に旅行したもので、自分たちの世代の問題に答えるとともに、自分たちの世代が創り出し得る新しい世界を示すために脚本やシナリオを書きおろして上演している。彼らが訪れるどの都市においても彼らは市長や、市参事會員や、教育當事者などに歓迎され後援されている。そうした背景の下に彼らは何百という學校にメッセージをもたらし、土地の住民全體の生活に影響を與えているのである。

フランク・ブックマンの運動のこうした多面的な發展をみるものは、そこに因襲や先例の桎梏から解放された頭腦と、自己を滅却した指導という珍しい特質を發見するであろう。だがそこには別にそれ以上のものがある。それは神の力についての眞正な傳播性をもつて擴大しつつある知識で、それこそ、すべてのものの基礎となるべき一つの不變の要素なのである。しかもその知識は十代の少年であろうが八十の老翁であろうが、フランク・ブックマンとともに世界に跨がる戦線に立とうとする何人にとつても必要缺くべからざる裝備なのである。

聖光のひらめきを時々身に感じた人は數限りもない。また星に導かれたものも多い。しかしフランク・ブックマンの場合においては詳細な、不斷の、そして正確な神の指導はあたかも眞晝の陽光のように自然的であり、強力であるといつた方が一層眞實であらう。彼は毎朝必ずそうした指導をうけるのである。さし昇る朝日がありがたいものであるとともに、避けられないものでもあるのと同じである。自分が決して完全無缺でないこと、時あつて進路をあやまることもあるだろうことを認める點において、彼は人後に落ちるものではない。また彼はあらゆる人に得られるものでなければ何も自分自身のために要求しようとするものではない。しかし恐らく我々の時代の何人といえども、彼ほど全的に神の導きを生のすべてとして受入れて來たものはないであらう。

ソーンヒル氏は前オックスフォードのハートフォード大學のフェローで、同大學禮拜堂附牧師である。また氏はMRAの産業劇ザ・フォゴットン・ファクターの作者として有名である。

I

オックスフォード・グループ

—キリスト教的革命—

前　　書　　き

第一次世界大戦後の十年間、オックスフォード・グループの指導者は大西洋の兩側にある諸大學、殊にオックスフォード大學から拔かれた。一九三〇年以後、毎年オックスフォードで會合が催され、いろいろの人が集つてこのグループが標榜するところの「プロダクティブ・ライフ」の質々を體驗した。その後、參會者の數が何千といふ増大ぶりを示すようになって、會合のこもし出す打ちとけた空氣は維持された。

一九三四年の會合には米國、南阿、濠洲、極東およびヨーロッパ諸國を含む四十五カ國の人が集つた。カナダからは特に大勢の人々が參會したが、同國へはその少し前にこのグループが行つて非常な反響を喚び起したのであつた。當時の首相R・B・ベネットはこういつた。「諸君のなしつつあることは政府の仕事より容易にした。そうして諸君の影響はあらゆる村々に、都市に、最も隔つたカナダの邊境において

さえも感じられている。」

同會においてブックマン博士はオックスフォード・グループの目的とするところを鮮明にした。左の陳述がそれである。

一九三四年七月、オックスフォードにて

オックスフォード・グループは一つのキリスト教的革命であつて、その念とするところは活きたキリスト教である。その目的は神靈の支配下における新しき世界秩序である。より善き人間關係を、非利己主義的協力を、より清潔な實業を、より清潔な政治を、および政治的、産業的、人種的反感を排除することを可能にする新しき世界秩序である。

今日、世界には新しい精神がみなぎつてゐる。光りは何人をも訪れることができ、あらゆる宗派に屬し、またあらゆる社會層に屬する男女をキリスト教的信仰の基礎的原則に還らせ、その基本的忠誠心を昂揚することができるのである。我々をわすらわしつある諸難題の解決は、民衆の間から湧き上るこのような精神から生れ出ねばならない。

人生のあらゆる方面における指導者は、我々の希望が「心の改變」にあることを確信するにいたつた。その證據は英帝國を通じて非常に多い。世界の改變は生き方の改變から來るであらう。

オックスフォード・グループは、この新しい秩序を實現するには全世界にわたる精神的目ざめが唯一の希望であることを信ずる。

改變された人々を基礎とするとき、永久的再建が確定的となる改變をはなれては、文明は久しきに堪えることはできない。

目ざめよアメリカ!

一九三六年六月四日、マサチューセッツ州ストックブ

リッジからの對英放送演説

英國にある私の友だちたる諸君が私への誕生日の贈り物として、この大西洋横断放送を可能にして下さつた御親切と御明察とに深く感謝いたします。この調子でいくと來年の今日は、ラジオをとおして誕生日のケーキを食べ合うことだつてできるようになるかもしれないね! 今、私は靜かなストックブリッジ村の青々とした芝生から諸君に話しかけています。この村は自由を愛好するニュー・イングランドのこんもり老樹の茂つたパークシャーの丘陵地帯のまんなかにあります。數日前のことでしたが、堂々たる榆の並樹や、ゆたかな芝生——人道から白や赤で塗られた舊時代の家々の玄關までつづくゆたかな芝生を兩側に控えた目ぬきの通りを歴史的假裝行列が

進んで來ました。先頭に進んだのは、美しく着飾つたストックブリッジ・インディアンの酋長ウィムパルウィースでした。彼はインディアンの間では王家の嫡流で、白人がやつて來るまで何世紀もの長い間、彼の祖先はこのあたりの丘陵を跋渉していたのであります。彼はいわゆる最後のモヒーカンというわけであります。それにつづいたのはジョナサン・エドワーズでした。有名な宣教師で、今日ではプリンストン大學という名になつてゐる學校の初代校長をつとめた人物です。彼は初めてストックブリッジのインディアンにキリスト教を説いたジョン・サージャントと一緒に古色蒼然たる乗合馬車に乗つていました。その次が例の幌馬車カッアド・ウゴンに乗つて西部から歸つて來たパイオニアの一群でした。太平洋沿岸から三千マイルの長途を踏破して歸つて來た何百人というものを表わしたつもりです。英國の將官と米國の將官とは肩をならべて歩いていました。それらにつづいて諸國の兵隊が歩きました。それから近隣の町や田園から集つた商人や労働者の大集團、最後に村の青年たちが四十八州のそれぞれの州旗と、我々とともに今日アメリカにおいて働きつある人たちの祖國の旗をかざして行進しました。

ストックブリッジ村は英國とのつながりをもつています。サイラス・フィールドが初めて英國

からアメリカに送つた電信を受取つた古い宿屋に面した四ツ角のところには、今でも緑色の鍍戸をもつた舊時代の白塗りの木造家屋が立つています。ヴィクトリヤ女皇から送られたその電信の文句は「何という驚異を神はなされたことぞ！」というのでありました。科學の驚異は今週オックスフォード・グループのメッセージ——キリスト教的回復のメッセージをアメリカにもたらしました。一九三六年の今日、地球の果てまで飛ばされるメッセージは「アメリカよ、目ざめよ！」というのであります。

一七七五年のある四月の夜でした。ポール・レヴィーヤはマサッチュセツの町々村々を騎りまわして住民を呼び起しました。當時の義勇兵である「リットル・ピープル小さき人々」は直ちに行動に出る熱をもつて呼應しました。先週この同じ村々や町々の上空を「今様ポール・レヴィーヤ」が「目ざめよアメリカ——オックスフォード・グループ、ストックブリッジ」と書いたメッセージを空中に引きながら飛行機で飛びまわりました。ポール・レヴィーヤは民衆を奮いたたした革命の先驅者でした。「今様ポール・レヴィーヤ」は世界を結合すべき精神的革命の鼓吹者であります。

アラスカからニュー・メキシコに、コペンハーゲンから上海に、陸を越え、海を越え、空を越

えて、謬見と混沌と混亂とに對する答として、この現代的大行列は行進する。パーテンダーも銀行家も、拘摸も貴族も、就業者も失業者も、ストックブリッジとその近邊の町村に開かれているオックスフォード・グループ全國大會の八つのハウス・パーティーの中に會同しているのです。ハウス・パーティーの一つは天幕都市の形をとつております。四百名のカナダ人は無防備の國境を越えて參會しましたが、只今、私がしやべつてゐるこの集りの面倒を看ているのは彼らであります。

カナダ人は何のためにここへ來たと思ひますか。

オックスフォード・グループは世界再造を目的とするキリスト教的革命であります。今日、世界における根本問題は、個人の中にあり、従つて國民の中にある不正直、利己主義および恐怖であります。これらの悪は重なりあつて離婚とか、犯罪とか、失業とか、頻發する不景氣とか、戦争とかいふ結果を産み出すのであります。數限りもない家庭内に鬭争が行われているとき、どうして一國內において、あるいは國際間に平和を期待することができましようか。精神的回復は經濟的回復に先行しなければなりません。これらの根本問題を處理しない政治的、または社會的解

決は決して十分ということではできない。人によつてつくられた法律は人格の代用物となることはできない。我々の目前の必要事は道徳的、精神的覺醒であります。人間の叡智だけではそれを達成することはできないのです。神が個人を支配するときのみそれは可能なのであります。

この支配を通じて、人は不安定と恐怖に悩まされる世にあつて、眞の自由を發見するのであります。途方にくれた時代にあつて創造的意圖を發見するのであります。道義的廢頽の内にあつて新しい道義力を發見するのであります。互いに衝突する利害關係の世界にあつて、神に對する共同の恭順をとおして、人は他と協力することを學ぶのであります。人は了解の糸を織ることによつて、爲政者をして永續的な成果を擧げしめる新しい外交を可能にするのであります。人類の自由のために各國が共同して働くときに、人は新しい信念を打ち樹てるのであります。

本當の愛國者は自國を神の支配下にもたらすために生命を捧げます。神が支配權をもつたとき、國々はその眞の使命を發見します。神に支配される國のみが世界を健全と平和とに導くことができます。

けれども、誰でもが他の人、他の國が、まず始めるのを待つています。答は我々の中に、従つ

て自國の中に起る覺醒の内に横たわつてゐるのです。

今や世界中の多くの普通人は神の支配への服従を悟りつつあります。彼らは新しい指導者としての質を要求するような新しい世論を形づくりつつあります。そのような指導は權威をもつて物をいう男女からのみ出て來るものであります。しかもその權威は日ごとに神の導きを體驗することを基礎とする權威に他ならないのであります。

世界の問題は、その中に住む人間を反映します。人間を造り變えてごらんなさい。國はたちどころに再造されるでありますよう。

もはや愚圖々々してはおられません。惡の勢力は結婚の神聖や家庭の安定をさえも脅かしつつあります。家庭が崩壊すれば、國家はともに崩壊します。責任は諸君にとつても私にとつても一身上の問題であります。オックスフォード・グループは、決意をするように挑戦しています。神に聽いて行動せよと呼びかけています。人が心を傾ければ神は語ります。誰でも神に聽くことはできます。誰でもその立場々々で始めることができます。

神はアメリカを支配するであろうか

一九三六年六月十九日、フィラデルフィヤからの放送演説

諸君はアメリカの眞の安全がどこにあるかを考えたことがありますか。アメリカの安全は神の支配の中にあるのであります。

神に支配される個人、神に支配される家庭、神に支配される學校、神に支配される産業、神に支配される政治、神に支配される國々。これはみな神から命令をうけることを意味します。

ある皿洗いが先日雇主にいいました。「私は飢えています」雇主は意外に思つて、「どうしたというんだ、食いものが足りないか？」とたずねた。すると皿洗いは、「いいえたべ物は十分なんですが、私は神さまに飢えています。どうも神さまが足りません」といつ

た。「なるほどナ、わしにも神さまは足りないかもしれないノ」と雇主も気がついた。

我々全部が必要とする普遍的なものは人間として神を必要とすることであります。我々が最大の國民として最も必要としているものは道義的回復であります。人を神から、そして他の人々から隔てている障壁は打破されねばなりません。

我々の多くは、他のものが正直でなければいけないとの主張をもつています。少なくとも我々には「他のものが正直であつてほしい」という點では一致します。そこで、もし諸君がそれほど他のものために欲するならば、自分でも少しやつてみたらどんなものでしょうか。他のものに正直であつてもらいたいと思うあまり、ある朝、ふと目をさまして自分がだんだん正直になるべきであることに気づくかもしれません。誰でも正直が、純潔が、無私が、愛が望ましいと思つているのです——他人にとつては。さらに一步を進めて他の黨にもそうあつてほしいと考えるものがあるかもしれない。しかしオックスフォード・グループはその上をゆきます。自分が、自黨がまず始めたらよいと信するのであります。

先日、私はオックスフォード・グループについて、ある黒人^{ニグロ}と話し合いました。彼は「みな

やるなら實に素晴らしい考えだ」といいました。そのとおりです。彼は要領をつかんだのです。我々は、こぞつてやらねばならないのです。

今日、決定的な案をもつていたり、道徳的および精神的回復の代價がどんなものであるかをはつきり知つている人は殆んどいないようです。それを實現するに必要な、結束され、訓練された行爲（神の支配下に行われる）を十分考えた様子がないのです。ひどいになると、自分は代價を拂わずに、他人に種をまかしておいて收穫だけを得ようと、希望するものさえあります。

幸いにも、代價を拂う人の數は幾年かの間にふえて來て、今日その影響は五十カ國において感じられていきます。また幸いにも、必要事を口にするだけでなく、答を指し示す政治家も出て來ました。そうした爲政家の一人はソールスベリ侯爵で、最近、英國上院でオックスフォード・グループについて次のように述べました。

「世界の現状は經濟的原因からでなく、道徳的原因から生れたものである。惡の核心はそこにある。我々のもつべき宗教が缺如していることである。この國および他の國々において現に進行しつつある一つの大きな運動において普通用いられている文句を借りていうならば、我々

の必要とするものは神に導かれる人々である。それは神に導かれる國民をつくり、新しい世界をつくるのである。その他の経済的調節は、みなあまりに瑣末で悪の核心にふれることができなからう。

ノールウェーの下院議長も、そうした爲政家の一人であります。彼は最近、ニューヨークで著名な評論家ローエル・トマス氏とのラジオ・インタヴューにおいてこういいました。

「今日、ヨーロッパの政治家たちの間には、在來の手段を基礎として實現される解決は、よくいつても一時的のものでしかない、との信念が強まりつつある。我々ヨーロッパの政治家の多くは、昨年中、オックスフォード・グループの仕事に接觸して、國際的危機に對する恒久性をもつた解決の新しい希望がそこにあることを感じた。」

またニュージーランドの首相や、中國の財務長官もそうした政治家であります。サヴェジ首相は「オックスフォード・グループにのみ眞の政策を見る」といい、中國藏相孔博士がアディントン卿に送つた電報は、先週上院における卿の演説に引用されました。それはこういうものであります。

「世界は今日、混沌と、頽廢と、解體の状態にある。人が利己主義と、嫉妬と、物質主義とに支配されているからである。オックスフォード・グループは絶對の愛と、正直と、純潔と、無私という四つの原則を唱えている。それは地理的區分や、人種的差別や、黨派的確執や、階級的闘争を超越した運動である。私はこの運動の原理と規律とは、世界の男女を新しい、よりよい社會秩序をつくるために痛切に要求されている共同の道義的、精神的覺醒において結合させるものと信ずる。神の靈能と導きのみが、人間の性質を變え、個人をも、國々をも和解せしめ、そうして地上に平和あり、個人の間には好意あらしめることができるのである。」

今選舉運動は進行中でありますが、問題をまぎらわしくしないことが大切であります。最も大きな選舉の論點は、我々が神を我々の個人的生活の師範として、従つて國家的生活の師範として選舉するであろうかどうか、ということでありませう。ある著名な言論人の言葉を借りていえば、「代表者たちおよび綱領に神あらしめよ、候補者に神あらしめよ、しからは他のすべてはそれらに添加されるであろう」と。

アメリカの選舉民が來るべき投票日にとくと考慮に入れねばならぬ「人物」は神であります。

眞の問題は、「神はアメリカを支配するであらうか」ということでもあります。

我々の國は、あたかも電報でも受取るように、神からはつきりした訓令をうけて、それをよく了解する人たちによつて治められねばなりません。それが本當の活ける神の獨裁であつて、他のすべての獨裁に對する答なのであります。それが本當の愛國主義であります。本當の愛國者は自國の復活のために命を献ずるものだからであります。

ここまで來ると諸君は、次のようにいつた有名な政治指導者の言葉の意味がわかり始めるのであります。「オックスフォード・グループはどの面においても政治に關係はない。とはいふものがそれが關係しない政治の面というものもない。神は政治綱領を指導するのみならず、政治家そのものをも指導するの故をもつて、オックスフォード・グループは、すべての政治にわたる一つの革命だからである。」

神に歸れ、そして新しい世界秩序に向つて進め。世界救済の唯一の希望は、巨大な規模において直ちに始めることにある。

神はその計畫を實現するために一人残らずのアメリカ人を協力者として要求する。國家的回復

と復活とは、我々が神とともに働くべく、完全な責任を受諾するとき成就するでありましよう。アメリカは、神の支配下に新しい世界秩序を創造するために、その任務を果す用意がなくてはならぬ。

アメリカの安全は神の支配の中にあります。偉大なる國としてのその運命は諸君や私がどのようなものであるかにかかっています。「神は自分が何をするかを欲するか」これが現時の、またいつの時代においてもの標識であります。始める場所は諸君自身です。始める時は今です。

革命を癒やすための革命

一九三六年八月九日、英國からの大西洋横断放送演説

私は、革命が起りつつあり、との報道が刻々に入つて來るヨーロッパから諸君に話しておりま
す。これから十五分の間に、諸君の氣持次第で、諸君自身が、ある一つの革命にどんな具合に參
加できるかを知ることができると思ひます。情熱を癒やすには情熱をもつてせねばなりません。
革命を癒やすには革命をもつてせねばなりません。革命に對するオックスフォード・グループの
答は、「もつと革命を」です。人間の性質における革命をです。それが我々の唯一の希望であり
ます。

一體オックスフォード・グループとはどうしたのですか。そうですナ、ある新聞記者はこん

な風に書きました。

それは制度でもない、

それは見解でもない、

それは革命を起す、

君の内に始めることによつて。

一つバーミンガムの英帝國産業博覽會の建物内で行われたオックスフォード・グループのデモンストレーションの様を描いてみましょう。その建物は、屋根のあるホールとしては全歐最大のもので、英帝國の物産陳列場に使われています。その週末に大變なことが起りました。英國が動き出したのです。英帝國の各地から何千何萬という人間が集つて來たのです。他に三十五カ國からも多くの人々が繰り込んで來ました。オランダ一國からだけでも五百人參りました。それらの人々の踏み鳴らす足音は、今、全ヨーロッパにこだましております。多くの國々から參集した千名以上の青年が新しく動員されて、行進するのに呼應する大衆のさまを想像してごらん下さい。オックスフォード・グループの動員とは何ですか。行進してどこへ行くのですか。一體、何だ

つて行進するのですか。物質的革命の時代に、彼らは精神的革命のために動員されているのです。戦争に動員されるのではなく、同じように重要な道義的戦いに動員されつつあるのです。

世界中の國々は今日傳統を失い、性格を失い、國たる立場をも失つて、どこへ行つたらよいのかわからなくなつてしまつたような有様です。我々の多くは、事態が急速に移り行く、そのあわただしさにさえも盲目になつています。

我々にとつて本當の問題は何であるか。諸君はみな早魃というものを存じでしょうか、我々は今日、精神的早魃に悩んでいるのです。恐怖と貪慾とは砂塵嵐のように諸國を覆うて、民衆を盲目にし、窒息せしめつつあります。それは人を人に反抗させ、階級を階級に反抗させ、國を國に反抗させています。

スペインの戦争をごらん下さい。どちらが勝つにせよ、人間的要素はあとに残ります。戦争は猜疑、嫉視、執念、恐怖に對する答ではありません。否、もし我々が本當に大切なものから遊離してしまふならば、戦争に勝つたとて答はその側にあるのではない。選挙運動も同じであります。國家の問題にも、世界の問題にも根本の問題すなわち人間の性質というものが未解決のまま

残されるのであるから、何の變化も起るはずはない。我々が人間の性質を國家的規模において徹底的に、容赦なく處理するまでは、各國は依然として暴力と破壊への歴史的道程を歩まねばならないでありましょう。

三千マイルの大洋を隔てようとこの根本問題に變りはありません。もし我々がその解決に失敗するならば、大洋は我々を救つてはくれないでしょう。ヨーロッパとアメリカでは症状はちがうかもしれないが、病患は一つです。病患は何ですか。恐怖と、不正直と、怨恨と、利己主義であります。我々は好んで自由を口にするが、實は我々は、我々自身の奴隷になつてゐるではありませんか。

今日考え得る二つの道は、崩壊か神の支配かだけであります。しかも崩壊は我々全體の利己主義の結果に他ならぬのであります。崩壊か神の支配か。もし我々が利己主義ならば、諸君と私とは病患の一部であります。それと同様に、もし我々が神に支配されるならば、諸君と私とは救治の一部となり得るのであります。

オックスフォード・グループは神の支配のための革命であります。そこでは、神は本當に諸君

と諸君の國とを導くのです。何ものかに導かれない人はありません。諸君は何によつて導かれておられますか。諸君自身の慾望ですか。それとも財布ですか。恐怖ですか。妻ですか。夫ですか。あるいは隣人の思わくですか。もし諸君を導くものが諸君自身の利己的計畫だつたならば、諸君は自國の仇敵であります。

神は世界を創造した。爾來、人間はそれを運営すべく試みて來た。そのことには終止符がうたれねばならない。諸君はウィル・ロージャースがよくいつたことを覺えているでしょう。「神は人間を天使よりはいくらか下のものにつくつた。ところがその後、人間はみずから少しずつ下降してやまないものである」しかし、今や新たな時代が始まりました。そこでは神は先行權をもつのです。

我々がもたねばならぬものは、押し寄せて來る物質主義の諸勢力を押し返すための全世界にわたるキリスト教的戦線であります。我々は教會が焼けることを耳にしますが、教會の焼かれることに對する唯一の答は火のごとくに燃える教會であります。

能率の神さまは不十分であります。ただの好意とよい事業は病患の核心には達しません。理想

主義は成功しませんでした。真相は、永續性のある社會的および經濟的回復はただ道義的、精神的回復の基礎の上にのみ建てられ得るということであり、あります。

諸君と私が百パーセント神に導かれ、神に支配されないならば、我々は實は混沌に貢献しつつあるのです。すべての微温的な人たちは混沌に貢献しつつあるのです。各國の運命は諸君と私とが神に支配されているかどうかにかかっているのです。

新しい光は世界にもたらされねばなりません。私は電燈を發明した人を知っていました。その人のつくつた最初の電球はヘンリー・フォード氏がデイヤボンの實驗室に大切に保存していませんから、今日といえども見ることができません。誰でも配電所との接続さえできれば電燈をつけることができます。神との接続をもつことも、それと同じく可能であります。偉大な科學者スタンメッツが、次の大発見は精神の領域において見られるであろうといつたのは、このことを豫見したからであります。接続さえ確かならば、神は我々に光りを與えます。

必要なことは、全世界にわたつて超國家的に電線網を張り、最後の地で、最後の職場にある、最後の人間とも接続することであり、あります。多くの人は一人の偉大な指導者の出現を待つており

ますが、オックスフォード・グループはそれは一人の人をおしてなされるのではなく、神の指導下に、ともに働くことを覺えた人々の團體をとおしてなさるべきであると信ずるものであります。

オックスフォード・グループは、神と接觸したとき、通常人が異常事をなし得ることを信ずるのであります。

神は人の心に考えを注入することができません。諸君はその考えを聴こうとしたことがありますか。諸君は紙と鉛筆をもつて、自分に與えられるそうした思想を書きとめようと試みたことがありますか。それはありふれた考えのように思われるかもしれないが、正直に向つてごらん下さい。そうすれば今まで見たことのない諸君自身の肖像を見ることができるともしれません。絶對の正直、絶對の純潔、絶對の無私、絶對の愛。それらはキリストの標準でありますが、諸君の標準ともなつておりますか。そうするとき、過去の間違いを正さなければならぬでしょう。私自身はそうしなければなりませんでした。私はまず手初めに六人の人に手紙を書いて、私どもの間にあつた悪感情は、みな私の過ちによるもので、彼らの過ちでないことを認めました。それから

私は眞實に人々の助けとなることができようになりました。忘れてはいけませんよ——もし諸君が世間にまつすぐになつてほしいならば、まず自らまつすぐになることです。

神の支配は革命に對する答たるにとどまらず、革命戦の中においても答となるのであります。大して久しくない以前に、私は實際の革命の中にいたことがありますが、経験した一つの革命において、神は私に、當局が最も危いといつた場所に、とどまつて動くなという直接の命令を與えました。私はそこにとどまりました。助かろうとして逃げた人たちは殆んど命を失わんばかりの目にあいました、私と一友人とは全く安全でした。

世界の安全、アメリカの安全、諸君の安全、諸君の家庭の安全は神支配にあります。

智能だけでは不十分です。効果のあるのは神への服従であります。アメリカもカナダも服従することを學ばねばなりません。

神は古えの預言者には語りました。諸君にも語るかと思ひます。神は傾聴するものに語り、服従するものをおして働きます。

もし諸君が、明朝少し早目に起きて、神に聴こうと試みたらどんなものですか。家族のものに

も聴くようにさせたらどうですか。各家庭に精神のラジオ受信機を備えつけたらどうですか。

我々は毎日聴くことができます。もし我々が聴いて、そうして聞えたことに従うならば、我々が共同して未曾有の大革命を招来して、キリストの十字架が世界を一變するであろうことは考えられることなのであります。

II

M R A の發足

前 書 き

一九三八年の初夏、ヨーロッパは神經戰におそわれていた。ヒットラーのオーストリア進駐はすでに民主主義諸國をして國防施設を急がせていた。同時に、それら諸國においては、戰闘的イデオロギーの挑戰に對應すべく、結束された精神の必要ということが、ますます強く感じられていた。

フランク・ブクマンは、見解とか個人的利害を超越するそうした精神が見つけられる方法は一つしかないことを信じた。すなわち全世界にわたつて道德的および精神的勢力の糾合がそれであつた。それらには集合點と哲學とが與えられねばならなかつた。「我々は、まだ神意の中にある偉大な創造的源泉から汲んでいない」と彼はいつた。「神には案がある。國民の合同された道德的および精神的力をもつてすれば、それを發見することができる。」

一九三八年六月の彼の六十回目の誕生日に、英國勞働運動の發祥地であるイースト・ハム公會堂で彼の

ために祝賀會が催されたとき、ブックマン博士はM R Aを發足せしめた。

左にかかげる彼の演説を聴こうとする三千にあまる大衆は堂に溢れる盛況であつた。諸外國から參會した人たちとともに、イースト・ロンドンの諸市長、參事會員、評議員といつた六十人以上の人たちが盛況を助けた。それらの人たちの多くは多年勞働運動を推進して來た闘士であつた。

この演説はワシントンのユナイテッド・ステーツ・ニュース（同年九月六日附）に一ページ大の社説として掲載されたのであるが、同紙の編集者デイヴィッド・ローレンスは、この演説を故ウッドロー・ウィルソン大統領の最後の一文「革命から離れる道」（ゼ・ロウド・アウェイ・フロム・レゾオリュション）——一九二三年八月アトランティック・マンスリー誌所載——と關連させて次のように書いた。

「ヨーロッパがまたも世界戦争を惹き起しかねまじき危機にある今日、ちようど十五年前ウッドロー・ウィルソンの筆になつた注目すべき一文をこのページに再掲することは時宜になつたものと考え……またこのページには今や世界的となつたオックスフォード・グループ運動の指導者たるフランク・ブックマン博士の檄文をも再掲した。私がこの二文をならべて掲載したのは、一九二三年ウィルソン氏によつて奏でられた情調が、一九三八年に世界の五十カ國において四海同胞の觀念を現實的に喚び起しつゝあるこの優れた米人指導者によつて、かくも雄辯に繰り返されているからである。」

一九三八年五月二十九日、ロンドンのイースト・ハム公會堂にて

我々は世界の現状から不安と憂慮とを感じないわけにゆきません。敵意は國と國との間に、勞働と資本の間に、階級と階級の間に盛り上りつつあります。憎悪と恐怖の代價は日一日と昂騰しつつあります。摩擦と挫折とは、我々の家庭の土臺を掘り崩しつつあります。

この時に際して、個人と國とを救治し、速かな、そして満足すべき回復への希望を與える療法はあるでしょうか。

療法は、我々が母の膝の上で學びはしたが、多くの場合、とうに忘れられ、または等閑に附せられた單純な日常的眞理、正直、純潔、無私および愛に歸ることの中にあるかと思ひます。

本質的にいつて、現在の危機は道義的危機なのであります。だからこの危機に臨んで、諸國は道義的に再武装しなければなりません。道義的回復は本質的に經濟的回復の先驅をなすものであります。絶對的正直と絶對無私が滿潮のごとくに盛り上つて各國を洗い流した場合を想像してごらん下さい。そこにどういふ効果が現われるでしょうか。税金はどうなりますか。借財は、貯金は。無私の大波が各國をひと洗いするならば、戦争は跡を絶つことではありません。

道義的回復は危機をかもし出さずに、生活の各面にわたつて自信と結合とを創造します。我々

はどうしたら急速に各國を通じてこの道義的回復を實現することができるでしょうか。それには人間の性質を變えて、人と人との間に、黨派と黨派との間に橋をかけるに足るだけの強い力が必要なのであります。各人が他の非をあばく代りに、自分の過誤を認めるときに、ことは緒につくはずであります。

神のみが人間の性質を變える力をもつております。

秘訣は、人が聽けば神は語る、人が従えば神は働く、人が變れば國は變るといふ偉大な忘れられた眞理の中にあります。少數者の中にその力が能動的に働くならば、國家の諸問題は溶け去るでありましょう。指導者たちが變れば、國民の考え方が變る。そうなれば世界は安寧になります。

「我々世界の改造者」——これは通常人の考えであり、意思ではないでしょうか。大概の人間は他のものが正直であり、他の國が自國に和してほしいと考える。我々はみな取らんことを欲しますが、指導者たちが變つたら我々はみな與えんことを欲するようになるかと思ひます。我々はこの新しい精神の中に、經濟的回復を麻痺させている諸問題への答を發見することができるかと

思います。

みなが十分に思いやりの心をもち、十分に他と分け合うならば、みな十分にうるおうのではないでしょうか。世界には各人の必要に應ずるだけのものは十分にある。しかし各人の貪慾を満たすに足るだけのものはない。

かようにして M R A の計畫に参加し得る失業者の数を考えてごらん下さい。國々を安定と、安寧と、健全とに引きもどすべく、一人残らずの人間が引きつけられ、糾合された状態を考えてごらん下さい。

すべての男も女も子供も動員され、すべての家庭は城砦とならねばなりません。我々の目的は單に各人が生活の必需品を十分にもつばかりでなく、M R A を實現し、それによつて各々自國の平和と世界の平和を擁護すべく正當の役割をもつことであります。

神は國に對しても國民の一人々々が、靈感と自由とをもつて參畫できるような、しかもあらゆる政治的計畫に先行する成案をもつております。

すべての就業者も失業者も M R A に参加する、——これが、すべての人を人間と、家庭と、實

業とを再造するために働かせるという、國家的サーヴィスの最大計畫であります。あるスウェーデンの製鐵工が私にいました。「精神的革命だけが人間と産業とが必要とするものに應じる力をもつている。」

またある労働指導者はいいました。「自分は労働運動が勝利を得るのを見たが、勝利の眞只中において一種の空虚を感じていた。オックスフォード・グループは私の生に新しい内容を與えた。私はそのメッセージの中に我々の労働運動および世界の産業の將來への唯一の鍵を認める。」人の内に新しい精神があつて初めて産業の内に新しい精神があり得ます。産業は新しい秩序の先驅者となつて、利己主義に代えるに國家的奉仕の念をもつてし、産業計畫を、神の導きを基礎として打ち樹てることができます。労働と、經營と、資本とが神の導きの下に協力するとき、産業は國民生活の中に本來の使命をもつのであります。

新しい人、新しい家庭、新しい産業、新しい國々、新しい世界。

我々はまだ神の心に内在する偉大な創造的源泉から汲んでいません。神には案があります。合同された國民の道義的、精神的力をもつてするならば、その案を見つけることができるであります。

しよう。

世界を再造するに足る強い道義的、精神的力を我々はつくり出すことができます。つくり出さねばなりません。そして我々はつくり出す覚悟であります。

リヴアイヴアル
レヴオリューション
ルネッサンス
宗教昂揚、革命、復興

一九三八年八月十六日、スウェーデンのヴェイスビーにて

今、我々は統一された戦線をつくり出したいものです。一目瞭然たる標的は我々が神に導かれているかどうかということがあります。我々が惻巧かどうかということではない、我々が何民族に属しているかということでもない、我々は今日、キリスト教徒として、*「導かれている人々」*としてここに集つたのであります。我々の権威の源泉は神の案なのであります。

私がこの話を終るまでに諸君の幾人かが決心されることを希望します。我々はいろいろ異つた目的をもつてここへ來ました。あるものは改變されようとして來た。非常によろしい、非常に必要なことです。またある人たちは、他の人々を改變する方法を學びに來た。それもまた非常に必

要なことではありません。

しかし危険は諸君がそこでとどまろうとすることです。私はもう一つの目的に大いに關心をもちます。どうしたら、ぼろぼろに崩れゆきつつある文明を救えるかということですか。それが私の關心事なのですが、もう一つ願うことは第四番目の目的ですが、世界の何百萬という人々に呼びかけたいという願望であります。

これらのことはみな自然に順序をおつて来るはずのものであります。一旦諸君が變つたならば、自然他のものを變えたいと思う。その次には文明を救いたいと思う。次には世界の何百萬の人々に呼びかけたいと思う。自然のプログラムです。

ところが罪とというものがある。諸君が罪とというものを認めるかどうか私は知らないが、事實、存在しているのであります。諸君の中のあるものはその存在について大いに議論を闘わしたいかもしれないが、どうかそういうことをして日を暮さないでほしい。そんなことをすると大切な要點を逃してしまいます。我々は議論をするために集つたのではない。建設的な計畫と、行動をするために集つたのです。

諸君の中のあるものが、オックスフォード・グループから期待しているものは、甘い、氣持のよい目ざめというふうなものであることを私は知つています。すなわち宗教昂揚集會リッヴァイヴァルというふうなもの、言葉を換えれば甘い臂ひじかけ椅子宗教であります。そんな風な考え方をする人もあるわけです。だが、もし諸君がそこで歩みをとめるならば私は憤感であります。もし諸君がそこに停止するのに、私がそれについて諸君に警告を與えないならば、私は諸君のためには敵であります。今日、そういう物の考え方をしている人は、大衆を救うために十分に考え、計畫しているものとはいわれません。

今日、再びただのリヴァイヴァル集會ということを始めするには、私は興味をもたないし、そんなことで十分だとも思いません。誰でもよいが、思慮に富んだ政治家にたすねてもらなさい。必ず各國の必要とするところのものは道義的、精神的目ざめであるというでしょう。それは絶對的に、根本的に必要なことなのです。しかし、リヴァイヴァルは單に思想の一水準にすぎない。そこで停止するのは程度の低い思想というものです。もし我々が、それよりも大きなものを喚び起さないならば、我々の前途は暗黒です。

しからは次の段階は何かといえ、革命です。革命は平安なものではない。その言葉さえ忌むキリスト教徒が少なくない。彼らはそれをこわがつて鳥肌になつたりする。そこから臂かけ椅子宗教を奉ずる鳥肌キリスト教徒という批評家が出て來るのです。

この節どのくらいの人が教會堂に行くかをかぞえてごらん下さい。また、なぜ教會堂は百パーセント民衆にふれていないかと考えてごらん下さい。私は革命が人々を氣持悪がらせることを知っています。だが、私は今日、諸君を氣持よがらせるために來たのではありません。また、諸君に好いてもらおうと思つて來たのでもありません。オックスフォード・グループがスウェーデン人にも、他の國にも與えるものは精神的革命であります。

しかし諸君の中にはそういう風に考えないものもいるでしょう。世界の最も賢い人々の中には、破壊的革命的の線に沿つて考ふるものがありまして、彼らはそれを推進しつつあるのであります。諸君に向つてひどいことをいつていいならば、ここに集つてゐるものの中には、現在のスペインの内亂を可能にしたのと同じ種類の可燃性分子がおります。もし我々が、より大なる精神的革命という見透しをもたないならば、他の革命が可能になるかと思ひます。

そうした種類の革命の氣持惡さを考えてごらんなさい。我々は、今日荒廢した教會堂に集つて
いるわけでありませんが、一體どのくらい多くの教會堂が今日のスペインでは文字どおり荒廢に歸
してゐると思ひますか。それが革命です。まことに不愉快なものです。要點をいいますと、――
キリスト教徒はヨーロッパを動かし得るキリスト教的哲學を築き上げるか？ 諸君はそうした革
命を達成し得る種類のキリスト教徒でありますか？ それは新約聖書ですか？ それはキリスト
教的ですか？ それが諸君のやろうとしてゐることですか？ それが諸君のプログラムですか、
政策ですか？

もし諸君にこの戦線に起つ氣がないならば、それまでのことです。私は諸君と喧嘩をする氣も
なければ、諸君を批評するつもりもありません。諸君はただ好きな方法で、好きなことをするだ
けの話で、それが諸君のデモクラシー觀というわけです。

私はそういうのを本當のデモクラシーとは思わないが、民衆の間に行われているデモクラシー
はそうしたものであります。その證據には、民主主義國の市民で、言論や行動において、デモク
ラシーの生命がかかつてゐるところの内在的權威を承認すまいとするもの數は増加しつつあり

ます。一人々々が独自の案をもっている。大したものだ、自由なんだ。誰でもが好きなようにやる。ところがオックスフォード・グループではそうでない。そこには本當のデモクラシーがある。人は好きなようにやるのではない。神の導くままに行うのである。神の案を實行するのであります。

私はここで革命家にとつて必要なすべての質について検討することはできません。使徒行傳や福音書には全部を與えた人たちが見えます。また全部を與えなかつた人たちも見えます。革命においてさえも、人によつては身のまわりに土囊など積重ねたのがありますが、諸君はどうですか。そんな型の革命家になりたいですか。もしそうだつたら戦線のはるか後方に居心地のよい場所があると思います。我々は最前線のどこかに本格的革命家をもちたいものだと思ひます。

それから第三の段階があります。精神復興スピリチュアル・リバイバルです。個人の生れ變り、國民の生れ變り、國の生れ變りです。諸君はどうかもしれない。「幻想だ、幻想だ、幻想だ、狂氣の沙汰だ」と。狂氣とは何のことですか？ どこにありますか？

個人と國の再生を我々は實現し得るでしょうか。國の再生とか、何百萬の人々にふれるとかい

うことを好まない人があります。彼らはそのような計畫をパブリシティー（宣傳）だといって嘲ります。舊約聖書を読んでごらんなさい。以賽亞書の五十二章六節から読んで見てください。ここでは第七節を読みます。

よろこびの音便をつたへ平和をつげ、善おとづれをつたへ、救をつげ、シオンに向ひてなんぢの神はすべ治めたまふといふものの足は、山上にありていかに美しきかな。（譯者云、平和をつげと、救をつげの「つげ」は英文バイブルにはパブリッシュといふ語を用いてある）

ここではパブリッシュといつていますか。そうです、パブリシティーです。如何に澤山のキリスト教徒や、ふだん伶俐な人たちが、このような他愛もないことで閉口させられるとはまことに驚き入つた次第です。何かを打ち樹てたいと思うとき、パブリシティーをやつてはいかん！ パブリシティーというのはすべて破壊のためのものである……破壊のためのものでなければならぬといふわけですか。

ゴスベル（福音と譯す）という語をごらんなさい。「善いニュース」という意味であります。第一面のニュースです。ところが、それが第一面に掲載されると、人々が承知しない。一人の人

間が抗議した。そして氣の利いた文句をならべた。それが擴まつた。何のためにその男は氣の利いた文句をならべたと思ひますか。一體、どうして人間はそういうことをすると思ひますか。私がするとしたらどうしてでしょう。もし私が、誰かに私の必要を指摘されたくないときには、私は一寸した防柵をつくるなり、一寸した煙幕を張るなりするでしょう。今いつた男の小氣の利いた文句は、毒ガスのように國中に擴がつた。ところが普通の人は防毒面をかぶっていないのです。

わかりましたか。小氣の利いた文句をならべた男は、自分自身の生活において敗れているのです。彼は敵であります。愛嬌のある敵であるかもしれないが、それなら一そう危険であります。彼は多數の人々が眞實のものを得るのを妨げているのであります。人々は敗北の穴に閉じこもつて出て來ず、それらに接觸することはできません。それらの人を癒やすことはできません。

人間というものは臆病でためらいがちで、批評を恐れるものであります。批評は氣持のいいものではない。私はよく知つています。初めて批評をあびせられたときには七首で心臓を刺されたようでした。だがもし、諸君が本格的な革命家ならば、人が何といおうが、精神の平衡を失ふこと

はないはずです。石がどう飛んで来ようが、一直線に進むはずです。批評のつぶては人を緊張させます。それを食つた日は一日張りきつていられるというものです。

ここでなされたこと——諸君が講じたすべての施設に對して、諸君が克服したすべての困難に對して、私は深く神に感謝するものであります。そのとおりなのであります。まだまだ陣営内には罪つみがあります。その罪というのは「程度の低い考え方」かと思ひます。

諸君は今日、舊約聖書の詩篇第五十一を讀んだがよいと思ひます。それは大した人間の體驗です。それから新約聖書中のキリストの十字架について讀んだがよろしい。キリストの十字架がわかるまでは決して、決してこの體驗に入ることはないでしょう。諸君の中には日曜日ごとにその話を聞いたものがあるでしょう。しかしそれは體驗ではない。もしそれが體驗だつたならば、何ものからもたじろぐことはないでしょう。

私は諸君に一つのことを約束しましょう——私は逃げません。他の誰が逃げようとも、またその結果がどうあろうとも、私は逃げません。私は、私がいるからというだけのことと諸君に一緒に來てもらいたくはありません。そういうことではないのです。そんなことだつたら貧弱な革

命です。貧弱な仲間です。キリストの十字架の繪をちよつと描いて見ようではありませんか。もし諸君がこの大十字軍に参加するならば、十字架の意義が會得できるでしょう。また私は物質的成功の希望をもつて諸君をいざなおうともしません。諸君が英雄になるだろうといつて、誘ひもしません。この國は如何に生くべきか、見本を産み出すことができるかと信じてはいますが、それで諸君をいざなおうとは思いません。十字架の個人的經驗です、私ではありません、キリストなのです。私が先頭に立つてゐるのではない、キリストが率いてゐるのです。

本日の午後にはいくつかの集會があります——法律家のや、教育家のや、みな大切な集會です。しかしそれより大切なのが一つあります。神と諸君との會見であります。そのために取消さねばならないならば、他の集會への出席は全部取消すべきです。今日の午後、諸君にとつて最大の一事は、どこかへ獨りで行つて、この革命家仲間の一人となつて戦線に立つかどうかを決めることです。只今すぐ決定しなさいとは申しません。諸君が決定しなければならぬことは、諸君と神との間のことです。一人でおやりなさい。紙に書きとめたかつたら、そうするがよろしい。財産の讓渡の場合と同じで、それは證文です。革命家仲間の一人として十分な、完全な指導をう

けんがために、諸君の生命を神に引き渡す證文であります。

そこで諸君は初めて自由になるでしょう。自由であるが故に、本當のデモクラシーをもつことになるでしょう。諸君に對する私の挑戦はこれです。

爲政者の型

前　　書　　き

一九三八年九月、ヨーロッパが戦火の巻になろうとするかに見えたとき、第一次M R A世界大會は、イスのインタラーケンに開かれた。いたる處、民衆は憂慮の内に國家的指導者の發言を待つていた。和戦の決は一にその言葉にかかると思われた。ロンドンではうちつづく危機の日々を通じて無數の人々は教會堂を滿たした。防毒面はすべての非戦闘員に配給された。そしてハイド・パークでは、民衆は夜間、防空壕を掘つていた。軍人に動員令は下つた。ヨーロッパの諸國からインタラーケンに集つて來ていた若人たちは、原隊に入るべく召還された。

世界中の報道機關は大會の報道に當つていたが、パリのイリユストラシオン誌（同年十月廿二日附）は社説において次のように論じた。

「この大會は、出席者を見ると特に興味ぶかいものがあつた。大西洋の兩側から來た政治家や外交家もいた。國會の議長たちも、外相たちも、高僧たちも、前無政府黨員たちも、それからつい數週間前にはまさに掴み合いをしようとした國々の代表者もいた。

このような異つた背景をもつすべての善意ある人々は、世界の平和を脅かす紛争を解決するには、力のみをもつてしては不可能であるとの信念をもつていた……最も猛烈な敵意への答は、精神面においてのみ發見され得ることを信じていた。我々は哲學と社會學の領域において忠誠と善意の原動力を創造して、それによつて少しずつ世界の相貌を變えていかねばならない。各人によつて共同にもたれる、そうした信念は、社會的、經濟的、または政治的の何れであるかを問はず、恐るべき諸問題を解決して、世界の人々に幸福をもたらすことに失敗するはずはないであらう。

そのような結果を産み出すには、人類社會にあつて永い間、相互の責任ということを意識しなかつた分子を、道徳的に再武装しなければならぬ。爲政者は新しい挺を發見して各國間の關係を正常化するために、顧みられずにあつた人間の情操に訴えるところがなくてはならない。そのために全世界的にM R Aの實驗を行うことには何の不都合もないであらう。そのような實驗はまだ試みられたことがない。立派な結果がそこから生れるかもしれないのである。」

フランク・ブクマンにとつて、この大會は疑いもなく、時代の運命をにぎつていと見られる人たちに向つて、痛切に要望される健全精神のメッセージを宣布すべき機會であつた。

彼は左の演説において、目前の諸事件に鑑みて、新しい評價をオックスフォード・グループとMRAと
に與え、さらに世界政治における忘れられた要素こそは、神が直接、人間の心に語るとき、必ず授ける答
であるとの所信を改めて宣言したのであつた。

(一)

一九三八年九月二日、インタラーケンに開か
れた第一次MRA世界大會における開會の辭

今や我々は、將來の正しい永續性のある平和の立案者を盛り立てねばなりません。世界平和の
ために提供されている現在の諸條件は、平和の要素をふくまないことが立證されました。それは
平和に對して有害でさえもありません。

我々は、各國が重大な決定をしなければならぬ危急の際においても、過去においてしばしば
役に立たなかつた人間の叡智よりも上位にあるべき「質」をもち、それをして十分に機能を出さ
しめるといふような精神をつくり出さねばなりません。

我々は一見不可能な、人間的に見込みのない状態に橋をかけわたさねばなりません。

我々は、各自が自分の困難を見るばかりでなく、他人の困難をも見ることでできる正しさをもたねばなりません。我々は萬人に、満足と安心とを與えるであろう答を、政黨を超越し、階級を超越し、朋黨を超越し、國家を超越するところの答を發見しなければならぬのであります。

今日ヨーロッパ全體の上に覆いかぶさつてこの陰性な黒雲に對する答は何でありますか。連日ユングフラウの上にかかつているこの不吉な雲はどうしたら拂いのけることができましょうか。まことに山々さえもが、かき亂された歐洲の氣分を反映しているかのようであります。

我々が必要とするところは、考え方と、欲し方と、生き方とに全面的に新しい水準に到達することです。それ以外の結論にゆくとすれば、それは全く盲目というものです。民衆は憂慮に満ちつつ、爲政者や指導者の發言を待つております。彼らはその發言から萬人への最大限の安んじが得られることを希望しております。すなわち民衆全體の共同の心が、常にもたらすべき自由と、平和と、正義とが危機に直面すると、少數の人たちの手に委ねられているからであります。

前大戰以來一貫したオックスフォード・グループの目的は、爲政者たることの全く新しい型および責任ある考え方の全く新しい標準を與えることにあります。それらの機能は神の導きの下に生きる人々、神と日々接觸し、日々、神に恭從することによつて改變された人々にのみ與えられるものであります。オックスフォード・グループの目的は、世界を再造して、永い間に得られた經驗が、いたる處において實際的であり、明示し得ることを、すでに實證すみの「生き方の原則」を供給することにあります。

オックスフォード・グループを、かくも澤山の國々において効果的ならしめたことについては、それを提示するのに何か特別の祕訣でもあつたわけですか。それは問題の根を衝くこと、すなわち人間の心の變化ということです。

我々が自ら引受けた困難な仕事は、日に日に高まりつつある憎悪と恐怖の結果を清算しようと努めることにあります。一見、我々の仕事が成功するのは難しいようではありますが、しかし個々の人間が懷疑と敗北主義の獄房から救い出されるように、國々も恐怖と、怨恨と、嫉視と、意氣銷沈との獄房から救い出されることは可能であります。しかも「光り」を受けた一人の人、一人

の偉大な預言者を通じて救われることが稀でないであります。歴史を読むならば、如何にしばしばそれが繰り返されたかがわかるであります。もし、一人の人にそれだけの力があるならば、各國內に一團となる人々が「光り」によつて、全く新たな世論を喚び起したならば、どんなことになると思いますか。

M R A が實現されたならば、國家の政策において「面子の維持」ということは問題でなくなり、各國は新しい責任を擔うことにおいて、みな新しい使命の中に威信を見出すであります。う。

世界は今日、猜疑と、恐怖と、貪慾の空氣の中に生きております。世界はこれに對する靈感にふれた擧を通常人からばかりでなく爲政者からも期待しています。然り、それは人間の叡智のみによつて導かれず、それに加えるに、神の計畫によつて導かれる爲政者でなければなりません。世界の疾患に對しては適切な計畫がなくてはならない。そしてもし、神に計畫があるならば、神はそれを實施する道具を用意しているはずであります。

(二)

一九三八年九月六日、インタラトーケンにおいて

世界は岐路に立つております。導きか大砲か、どちらかを選ばねばなりません。導きの聲を聴くか、大砲の音を聞くかです。世界は新しい道德的空氣を必要とするといわない爲政者はありません。しかし精神的に偉大な眞理を口にするのと、それを實踐躬行して國民生活における常道とするのは別のことであります。そこに問題の眞の難點があるのです。すべての人々に、毎日、神の支配下にあるべく心を決めてもらいたいのはそこです。そういう生き方をしないがために國民の生をも、世界の生命をも飢えさせているのです。

精神的指導ということは、普通、世間がその言葉の與えている内容よりは、はるかに大きい積

極的行動を内容としてもたねばなりません。誰かが精神的指導について語ると、「ありがたいことだ、必要なことをいつてくれている、わしが出しやばるには當らん、大丈夫だ」という人が非常に多い。聞いた人たちは「そうだ、そうだ」と賛成して、そして相變らず、てんでに勝手氣儘なことをしている。

オックスフォード・グループは、利己主義に對して不斷の世界的戦争を戦つてゐる、各國の人からなる密集部隊であります。前大戰以來、活動をつづけて、諸國の精神的復興に當るべき人間を訓練して來ていたのであります。

誰にだつて、變つてほしいと思う他の人がいないということはない。どの國でも變るべきだと思ふ他の國がすぐに念頭に浮ぶ。自分が變つたらどうでしょうか。もし人々がみずから變り、そして他の人々や、國々を變える力をもつたなら……我々のすべての問題に對する答はそれだろうと思ひます。オックスフォード・グループの信するところもそれです。そんな風に單純で、自然的で、當り前のことなのです。そしてそれが萬人の待望していることなのです。國々の必要事でもあるのです。どうして我々は健全精神の時代に到達して、それを實行しないのでしょうか。最

も低い標準に照しても、それはすべての人にとつての保険です。最小限に見ても、それは安全を意味します。神は十分の答をもつているのですから。

すべての國の、すべての人は導きに聽かねばなりません。どこの國の、どの家庭にとつても、計畫を神から得るといふことが自然的で、當り前のことでなければならぬ。産業において、工場において、國民の生活において、議會において當前のことは神に耳を傾けることです。各國民はそれぞれの流儀によつてそれに表現を與えるだろうが、神に支配され、神に率いられるという點で、みな同じになることです。かようにして神に率いられるとき、すべての人は互いに了解し合ふのです。

この哲理の中に恒久の平和があります。他にはありません。どこをたずねたとて、ここ以外にはありません。それは神の支配から生れる平和であります。神の支配ということが、神の指導を求めるのを意味するという點は、改めて申すまでもありません。

神の導きに耳を傾ける……このことは今日、世界の政治において忘れられた要素であります。だが今でもある國々においてはすべての國法は、少くとも法令全書によれば「神の指導の下に」

制定されております。しかしすべての個人に神支配による精神復興があつたとしてごらん下さい。全世界にわたつてそれはどのように強い力でありましょう！

それは我々の内にある潜在力——我々が往々、國民性と名づける、誤れる遠慮のかけにかくしている潜在力を、十分に働かせることになるでしょう。もしそれらの潜在力が解放されて、神の下に糾合されたならば、世界の考え方と生き方とを變えるに足る力を産み出すであります。

また神に導かれる少数者の内にも大した力はあります。ジャンヌ・ダルクというような人物のことを考えてごらん下さい。彼女は自國を救つたではありませんか。彼女に來た神の聲は、彼女の同胞にとつて道理の聲になつた。それが現代の必要とするところのものであります。神の聲はもう一度人間の意思とならねばなりません。

この神支配のメッセージが届くところの數百萬の人々の力をとおして、神が何をなし得るかを考えてごらん下さい。精神力は今なお、この世における最大の力であります。

(三)

一九三八年九月十日、インタラーケンにおいて

今朝、私はアルプスの連峰が旭光に照り輝き始めるとき、ユングフラウの嶺上に見える朝陽の炎を見ました。あれは、ヨーロッパと世界とのために、新しい日を告げる神の光明となるであろうか。それとも滅亡の運命にある文明の消え失せてゆく光りとなるであろうか。世界は今、この歴史的選擇の前に立つていたのであります。

今日の決定は歴史の手綱をとりつつある少數の人たちにあります。我々の一人々々も、「如何なる困難に遭遇しようとも、我々の生活、我々の國は絶対に活ける神によつて支配されねばならぬ。我々は世界のために神の計畫を受諾するものである」とのおごそかな決意をしなければな

りません。

オックスフォード・グループは國民の生活をしつかり支えるような強い素地を織り出そうとしています。それは國民に活ける神を意識させるのであります。それは國民の眼前に「導きへの服従」という第一義的國家政策をにかけております。

そうすることによつて家庭生活は國民の健康を確保し、立派な市民たるべき、神に支配される子供を仕立てる。そうすることによつて、道徳的に健全な教師と學生とが神に教えられるときに、教育は靈感にふれるのであります。

かくして産業は希望をもちます。何となれば自信をもつことによつて擴張され、神支配によつて調和と能率をもたらすからであります。資本と勞働は相携えて手の指のように働きます。各人が勞働を分擔し、各人が國民の資本を築き上げます。

ある首相はいいました。「そうなれば、政治はより容易になる」と。人が神の下に自らを治めることが多くなれば、外部からの政治はそれだけ少くてよいからであります。正直が上昇すれば税金は下降する。民衆が最も明らかに神に導かれるものを指導者にえらぶのは當然であります。

M R A は國民的血管の中に白血球と赤血球とを、エネルギーとそれを保護する力とをつくりま
す。健全な有機體が病患を投げすてるように、頽廢と分裂の毒素は投げすてられます。

オックスフォード・グループは各國の問題に對して、人をもつて答える世界的有機體をつくり
つつあります。それは、その老大な使命を果すために、神支配の下にすべての男女を糾合しよ
うとするのであります。世界再造において、諸君はどういう役割をもちますか。神の命令の下に糾
合されることを拒むものは、とりも直さず世界破壊の目的に糾合されるものであります。

戰時においては、國家は國防のために全エネルギーを動員します。諸國民が共同の敵を見ると
き、各自相互の争いをすてて共同の行動において結束します。例えば、地球が火星からの途方も
ない大軍によつて侵入され、我々の存在が脅かされたとする。その場合、地球は擧げて自己防衛
のために協力しないでしょうか。

今、現にすべての國民が肩をならべて戦わねばならない共同の敵はないでしょうか。ありま
す。恐怖と、貪慾と、怨恨という共同の敵は、國々を破滅の土壇場へもつて來ようと、恐ろしい
正確さをもつて働いて來ております。

個々の人に影響をおよぼすことのできない方法が、どうして國々に影響をおよぼすことができましようか。自分の過誤を軽く見逃す人たちの講演や空念佛に、諸君は共鳴しますか。もし共鳴しないなら、どうして國々がそれに共鳴することが期待できますか。

ただMRAのみが國々を結びつけることができます。それは恐怖をいだかせず、自信と感謝をもたせるのであります。それは神に指導される男女から成る世界的有機體、すなわち責任ある人類家族の中にすべてを結合するのであります。

人類は岐路に立つている。我々は自分のために、また各々の國のために最後の決定に到達せねばなりません。收拾することのできない暴力と暗黒とへ導く利己主義の道をえらびますか。それとも、我々がともに生きることを知り、正義、諒解、平和という古い美德が、神の下で健全な人類を統治するところの、健全な世界へ導く十字架の道をえらびますか。

選擇は各人にかかっています。各人は神の下で人間の再造者であり得るとともに、神に支配されるすべての人は、MRAのための一勢力となるのであります。

この信念は諸君の心の中に熱情となつておりますか。もしそのとおりならば、それは火のよう

に諸君の國內に擴がるであります。

決然起つて活ける神の主權を受諾し、王中の王の下に編成されることによつて自國のために戦い、^{せい}そうして平和と新しい世界とに^あこがれる人類の痛切な飢えに答えるような人々はどこにおりますか？

秤をかたむける一事

前 書 き

インタラーケンの大會後、ブックマン博士はジュネーヴに招かれて午餐會に出席した。參會者は五十三カ國から國際連盟に來ていた外交官その他の代表者たちであつた。左にかかげる演説はその席でなされたものである。

ノールウエー前國會議長C。J。ハンプロー氏は博士を紹介してこういつた。

「我々國際連盟に來ている代表の數名は、今日ここに集つてブックマン博士と他のオックスフォード。グループの人たちに會い、兼ねてその話を聞こうとして諸君をお誘ひした。そうしたわけは、今日のような憂慮と恐怖に満ちたときに、希望と、信仰と、力とに會うことは最も重要だと考えたからであります。

我々は、これらの人たちは我々の失敗した根本的事柄において成功しているとの印象をもつものであり

ます。彼らは國籍と政治上の主義の如何にかかわらず、人と人との間に親しい交わりを創造した我々が、何年もかかつてさがし求めながら、ついに發見することのできなかつた建設的平和をつくり出したのであります。そこで彼らにここへ来て、すでに澤山の國々において推進して來たM.R.A.を、ここでも推進すべき心構えを教えてくれるようにと頼んだのであります。我々が政治を變えることに失敗しているとき、彼らは人を改變し、新しい生きる道を與えることに成功したのであります。」

一九三八年九月十五日、ジュネーヴにて

危機に瀕した際には、私どもはこれまで認めて來たすべての價値^{ヴァリュ}を、改めて検討し直す必要があります。私どもが一般に認めて來た標準は役に立ちません。萬人にとつて新しい「生活の質」が必要であります。私どもは、あるすぐれた質をもたねばなりません。怨恨とか、嫉妬とか、貪慾とか、見解とかいうものは私どもが最優秀のメッセージを得るのを妨げるのでありますから、それらを超越する「生活の質」をもつことが必要なのであります。

人も國も長い間、病的なものの考え方をして來ました。みな自己陶醉の癡痺症にかかつております。世界はそれ自身の罪の毒に中つています。それ自身の利己主義のために目がくらんでいま

す。人は當然もたねばならぬと知つてゐるものよりも低い標準を受諾してゐるのであります。

普通の人間および指導的地位にある人々のものの考え方を變えるには、ある超人的な力が必要であります。全面的に、生き方の新しい哲理がなくてはなりません。つまり黨派を超越し、階級を超越し、朋黨を超越し、國家を超越するような質が必要なのです。すなわち、神の支配が必要なのです。

神支配が唯一の、眞の政策であるということを口にすると、それを國家の生活における現實とするのとは別のことです。全く新しい素地を織り出さなくてはなりません。私どもはいずれも一連の會議が大きな希望をもつて開催され、そして失敗に終つたことを知つてゐます。だが、もし會議が神に支配されたならば、世間をアツといわせることでしよう。そのような會議は必ず成功して、目指したことを達成するからであります。

神支配を自分のプログラムと、人類の病弊を救治し、永續性のある平和をもたらすものは超人的爲政家であります。歴史上の大人物は、戰爭に對する答を口に唱えるばかりでなく、實行に移すことのできる人であります。他人の缺點を摘發する代りに、自己の缺點を告白する勇氣のあ

る人でもあります。

個人も國も懺悔の念をもたねばなりません。個人を覺醒させれば國も覺醒します。そうなれば私どもは新しい道義的空氣をもち、現在の危機や頻發する多くの危機に對する答をもつてありましょう。この偉大な仕事は、神と人との叡智を合わせもつことを必要とします。

各國の爲政者はだんだんに、これのみが恒久性のあるプログラムであると信ずるようになっておりますが、私どもがなお必要とするところは、それを各國において實行に移す意思のある人間を育成することにあります。ベルの電話の初期のようなものです。取りつけもまだ十分でない、聞きとりにくいというわけであります。

敗北と勝利を兩端にかけた秤を傾け得るただ一つのこととは、神の決定的聲であります——爲政者と國民とが神の支配の下に結合することにあります。世界の爲政者たちは新しい日と新しい道とを拓いて、新しい世界の平和の作者たる勇氣がなくてはかなわぬことです。

労働界への精神的遺産

一九三八年十一月、英國の全國労働組合クラブ

によつてブックマン博士のためにロンドンで催

された午餐會における演説

まず第一に、私はここへ招かれたのを非常にうれしく思つてゐることを申し上げたいと思
います。労働者の幸、不幸を最も強く念頭におく人たちが、しばしば繰り返した睦じい集いによ
つて、神聖にされたこの二階の環境の中で晝飯をいただくことのできるのは、まことに喜ばしい
限りであります。諸君はここですいぶん澤山の計畫をねつたことでしょう！ここに列席してお
られるベン・テイレットやトム・マンのような古い革命家と一緒にいると、私は本當にうちくつ
ろいだ気分になります。諸君について私が會心に思うのは、果斷と公明正大という點です。ここ
にいる人たちは、迫害がどんなものであるかをよく知つてゐます。私も一個の革命家なので、そ

の味を知っています。「迫害は預言者を鍛え上げる火である」という思想を、神が私に授けたのは、ある迫害期間中のことでした。

オックスフォード・グループは一つの革命運動です。だから労働階級がそれを了解してくれるのです。だからこちらも労働階級が了解できるのです。両方とも革命のために戦っているのです。

私は今、自分たちの特殊問題における權威者で、多大の經驗をもっている人たちを前にしてしゃべっているのですが、わずかな時間ですべての関連した問題に言及することはできない。そこで私が主なるポイントとしてしゃべりたいのは、これらの重要問題を解くために必要な背景は、新しい精神であり、新しい精神をもつ新しい人であるということです。

故ケヤ・ハーディーが労働界にもたらした新しい精神のことを考えてみてください。英國と世界とが、社會的に、經濟的にケヤ・ハーディーに負うところのものを考えてみてください。

英國の労働は精神的目ざめを搖盪として育ちました。社會的および經濟的政策に、そうした目ざめがどんなに効果があつたかを量ることは誰にもできません。

我々は貿易の復活、商業の復活を大切に思います。しかしそれよりも大切な要素がある——それがM R Aの目的であつて——精神的革命と社會的、經濟的復興ルネッサンスに導くところの道德的、精神的復活であります。ルーズヴェルト大統領はいいました。「社會的問題だろうが、政治的問題だろうが、經濟的問題だろうが、精神的目ざめの火の前にとけないようなものは恐らくないであろう」と。

英國の勞働とM R Aとは同じ處で、イースト・ハムで生れました。英國の勞働を育んだと同じ精神がM R Aをも育んだのです。そしてM R Aもまた世界の人心を捉えました。

英國勞働界の指導者たちは、この間デイリー・ヘラルド紙にこういうことを書きました。

「根本的にいつて、世界の不安は物質主義という根本病患の中に見出される。その物質主義は、この國とかあの國とかでなく、すべての國々に蔓延している利己主義、恐怖、貪慾の中にその姿を現わしている。我々はみな罪深い。すべての國々における勞働は、もし人間のおよび精神的の價値を、物質的事物の上位におく傳統に忠實ならば、國際的障壁の上に橋をかけ、國際的和解に決定的役割を演ずることができぬ。

それが世界の情勢に非常な貢献をなし得る結果として、黨派と我利の聲は効果的に處理され、恐怖は消え去り、人類のための神の偉大な計畫は啓示され、表現を得るであらう。かくのごときは、初期の労働指導者中のすぐれた人々の活氣ある精神であつたが、それはまた再造されねばならない。これがMRAが労働界にもたらす意義である。」

私は労働者の境遇を知っているし、またそれを味わつたこともあります。私が一番初めにやつたことは、ある工業都市で労働少年のためにホームをつくつたことです。私の心がけたことは、彼らが十分に食ひ、正しい環境にあることでした。その仕事の手初めは、たつた一つの憐れな部屋に住んでいた一族の面倒を看ることでした。父はすでに施療院で死んでいた。母は飲酒狂、子供らは小蠻人で學校へ行くのを罰と同じように感じていて、朝やつとのことで學校へつれて行つてやると、晝ごろには、もう逃げ出して三日ぐらい歸つて來ないといつたことも度々でした。何か仕事の道に入れてやろうとしても、彼らは興味がない。一定の時間、職場にいななければならぬからです。一日に三度、ちゃんと坐つて飯を食ふということさえも、彼らには窮屈だつたのです。

その上に、私はホームの理事たちとうまういかなかつた。彼らには榮養とか訓練とかいうことがわかつていなかった。そこで衝突となる。そのとき私は、自分もやはりあの子供らと同じように我意をおしたいのだな、と氣がついた。同時に、我々の社會問題の解決は、人間の心の中にあることがわかりました。私が變ると、周囲のものも精神も變つた。それから我々は協力し、結合することを覺えました。

それは労働界が世界に與え得る大きな教訓であります。この間、労働階級との協議會がすんだあとで、ある指導者が私にいました。「君は我々に新しい親睦を與えた。それは世界親睦の精神にならねばならない」と。

「我々に必要なものは新しい融和である」と、今この席に他の労働婦人たちとともに坐つてゐる一人の私の友がいました。婦人方は、主婦としてパンにつけるゼリーをつくる時のことをご存じに相違ないが、ゼリーになるためには固まらなければならぬ。ゼリーに堅さと結合を與えるには、固まらなければならぬことを主婦は知つてゐる。今日、英國が必要とするものはそれです。固まらなければならぬ。我々は融和の秘訣を知らねばならぬのです。

私は今日、米國の製鋼業内のC I O組合長からメッセージをもらいました。彼は英國の勞働界を研究するために、さき頃この國へ來ました。そしてアメリカの勞働界のために一つの新しい使命を擲んで歸りました。米國の勞働界は今異常な状態にあります。分裂が起つて、指導者たちがみな一致しているというわけでないのです。ところがこの人のメッセージは、對抗している指導者たちの間に一致はあり得る。彼らはみな變らねばならん、變りさえすれば一緒になれるというのです。

この私の友人は勞働界のために奔走し、一身のために何ら求めるところがないことを、みんなが知つてゐるものですから、こんなことがいえるわけです。米國勞働界内に起つた、このような分裂から來る損失を考えてみてください。それが生産的エネルギーをどんなに涸渇させているかを考えてみてください。

かつて私どもが訪れたある國においては、二つの政黨が公然相手をスリと呼び合つていました。ところが私どもが去つたあとで、兩政黨の指導者たちは會合しました。新しい融和が生れ、そこから新しい政策が出て來るようになりました。保守派が非常に建設的になつたのですか

ら、労働派がそれに信任投票を興えるというようなことになりました。労働派の領袖たちはいいました。「この基礎の上に立つて労働派の哲理をもう一度考え、融和を打ち樹てねばならないだろう」と。

世界は新しい道徳的、精神的空気を必要とします。オックスフォード・グループはどの黨においても、どの階級や宗派においても人々がともに生き、ともに働くことのできるような道徳的、精神的空気をつくり出しつつあるのですから、國家にとつて必要事であります。

労働界が一致を見出せば、國民を結合することができます。神に率いられる労働界は世界を率いることができます。

全米記者クラブへの報告

——英國におけるM R Aへの反響について——

前 書 き

一九三九年の春、フランク・ブックマンは三年ぶりでヨーロッパからアメリカへ歸つた。彼とともに諸外國人を合わせて百三十人のM R Aに訓練された人々が渡米した。その人たちはヨーロッパにおける多くのM R A運動に従事した古參者であつた。

この訪米の目的は、M R Aの概念を全米大陸に普及するにあつた。フランク・ブックマンは、簡單ではあるが革命的な一つの概念を一億三千万大衆の間にゆきわたらせるためには、*「*ニュースをつくる*」*ことが必要であるのを知つてゐた。

一九三八年八月、スウェーデンのグイスビーで彼は、「ゴスベルという語をごらん下さい。善いニュースという意味です」といつた。その前に、彼はイザヤ書から次の一文を引用した。「よろこびの音便をつ

たへ平和をつけ、善おとづれをつたへ、救をつけ、シオンに向ひてなんぢの神はすべ治めたまふといふもの足は、山上にありていかに美しきかな。」(ヴィスピーーにおける演説中の注Ⅱ六五頁参照)

アメリカにおけるM R Aの發表は「ニースをつくつた。そのメッセージは新聞とラジオとによつて、あまねく發表された。フランク・ブクマンと彼のチームはニューヨーク、ワシントンおよびロサンゼルスにおいて偉大な集りを催した。そういう場合には四つの絶對的道德標準を象徵するM R Aの四つの柱は必ず列國の國旗の間にかかげられ、また各國いるとどりの衣裳や音楽は世界を蔽いつつあるM R Aの規模を誇示した。例の風笛フックパイプを高くかざして、キルト(スコットランド高地住民の着る短袴)をまといつたスコットランド人の一團などには、熱狂した米人群衆は雷鳴のような喝采を送つた。

この運動を始めるに當つて、米國の主なる新聞人は、ワシントンにある全米記者クラブにフランク・ブクマンを招待して、左の報告演説を聞いたのである。

一九三九年五月八日、ワシントンにて

現代人は三つの大きな仕事タスクに直面しております。平和を保ち、それを恒久的にすること。世界の富と職とを萬人のためのものとし、何人の搾取にも委ねないこと。それから平和と繁榮とを我の主人でなく、我々の従僕として新しい世界を築き上げ、新しい文化を創造し、そうして黄金

を追う時代を變じて黄金時代にすることでありませう。

どうかすると、人間は自力で黄金時代を實現し得るかに信じたことがあります。しかし人間の智慧は不十分であることが立證されています。今日、我々は智慧の限りに到達しました。我々がひとしく渴望する新しい世界は、我々の叡智のみによつてはもたらされない。ただM R Aの仕事において神に従い、協力することによつてのみもたらされるのであります。M R Aはその道を指し示します。それが現代人への神の答であります。

現代が必要とするものは、神によつて設計され、すべての人によつて運営されるデモクラシーの新しい型であります。

今日は諸君に、大西洋の向う側でM R Aにどのような廣い反響があつたかについて大略を報告いたします。最近ロンドン・タイムス紙、またその他の新聞に掲載された注目すべき一連の手紙、その他はヨーロッパの注意をM R Aにむけました。國民生活の力として如何にそれが必要であるかは、諸政黨に屬する國會議員の一團によつて署名された聲明書に強調されております。すなわち、

「高い品性をもたないデモクラシーは崩れる。また自稱審判官として他の制度を批判したとして、それで足りることではない。低下された道徳的標準が破壊的勢力のための苗床となつた時代において、デモクラシーは改めてその力の源泉を探究し、そうして道徳的原則の力を世に明示すべきではないか……M R A を目指す十字軍は、高速度をもつて擴まりつつ、世界中の主要な鬭争の中心點において和協の素地をつくりつつあるようである。我々は心ある人々の間に、このようなものが一般に必要であるということについて異論はないであろうと信ずる……。」

(注)

聖歐を發動させた歴史的書翰で、その署名者の中には英國の空軍元帥、海軍元帥、二人の陸軍元帥およびソールズベリ卿やポールドウィン卿の名の見える重要な文書には、左のごとき文句が含まれております。

「故に現在、眞に必要なことは道徳的、精神的再武装である……この國および他の國々において日に日に増大しつつある一國の人々は、それを目的に進んでいるのである……もし我々が列國の人々とともに、今國防のために注ぎ入れることを餘儀なくされているエネルギーと智謀とをこの事業にむけるならば、世界の平和は確保され得るであらう。」

神の活ける靈は各人と同じく、各國を最高の使命へ向うべく呼びかけ、かつ恐怖と貪慾、猜疑と憎惡の障壁を打破するのである。この靈は衝突し合う政治體系を超越し、秩序と自由を和解し、再び眞の愛國心を燃え立たしめ、すべての市民を國家への奉仕において、すべての國々を人類への奉仕において結合し得るのである。」

如何なる世界的運動も、勞働階級の支持なくしては成功することはない。しかるに、幸いにも M R A はこの支持を得ておるのであります。五百萬の組合員を擁する英國勞働組合大會の現議長および三名の元議長は、心の底から後援者になつていてのであります。誰でもが要求しているものは、新しい考え方と新しい哲學とであります。M R A は英國勞働運動の發祥の地であるイースト・ロンドンで育てられました。勞働運動におけるケヤ・ハーディーの古い協力者の一人であつたトッド・スローンはこういうことをいいました。彼は「商賣は時計師、生れつきは政治運動屋」と自分を紹介する男です。

「このイースト・ロンドンで民衆は新しい指導力に對して本當に飢えている。彼らはこの新しい考え方を求めているのだ。だから M R A はこのウェスト・ハムに来てから四方八方に擴が

つていつた。今日、一家こぞつてこの「生活の質」を生きている家庭は非常に多い。

私にはこれだけが意義のある革命である。人の性質の變化——しかもそれは現實であるのだ。」

私の最後の言葉は、英國における諸君の仲間——新聞發行者および編集者から得たものであります。彼らは業界雜誌「ニュースペーパー・ワールド」に一書を寄せて、M R A のプログラムは「國家奉仕の根本的條件」であるとの信念を述べました。

「責任ある自由の傳統を重んずる我々新聞人には、この事業において特別の任務がある。この事業は我々に、國內における融和と積極的再建への意思を、新聞をとおして創造し鼓吹すべく本氣になつて當ることを要求する。それが我々の職業的自由を最もよく獲る所以であるとともに、我々が即座になし得る實際的貢獻でもある。」

その後一週間たつと、また同雜誌に新聞人の一團から次のような反響が現われました。

「我々議會記者は、先週貴誌に掲載された國民の道德的、精神的再武裝において新聞が務め得る決定的役割を力説したところの社主および記者協會の代表者の手紙を歓迎するものであり

ます。

我々は不斷の努力をもつてこの理想のために働くことによつて

全地球にかけわたすべき、

人から人への橋、

を造ることを誓います。

注 この書翰は、他の書翰とともにヨーロッパの主なる國々、およびエジプト、パレスチナ、ペルシヤ、インド、ビルマ、南阿、オーストラリヤの新聞に轉載されたのである。

眞のアメリカの脊骨

一九三九年六月四日、ワシントンの憲法

館に開かれたM R A 全國大會において

M R A は神の與えた一つの思想の勝利であります。それは文明を脅かす危機への答として出て來たものであります。古い眞理は全世界にわたつて再び強調されました。それは眞のアメリカの脊骨であつた單純な國產眞理、すなわち神の導きと心の改變とであります。

これらの偉大な眞理がもう一度把握され、もう一度實行され、元の權威に復せらるべきであることに異存のあるものではありません。この眞理は、實地に行われるならば、必ず求められつつある答をもたらすであります。いたる處に釘打られたように男女の注意をひいた言葉は、**“道德的、精神的再武裝”** というのであります。

將來の指導權は精神的勇氣ある人、一ヤードには必ず三フィートを與え、一ポンドには必ず十六オンスを與える人の手に歸します。アメリカ人として、愛國者として我々は、M R A はすべてのものが合致し得る共通點であることを認めます。物質的に完成を目指す時代に、我々は精神力時代を招来しなければなりません。神の聲は國民の聲に、神の意思は國民の意思にならねばならない。それが眞實のデモクラシーであります。

アメリカには、商業において、家庭において、工業において、中央、地方の政治において問題がないわけではありません。必要なことは國民が正直、無私、愛という基本的美德に再献身することにあります。そしてもう一度、何が自分らを分つかよりも、何が自分らを結ぶかを求める意思をもたねばなりません。それが新紀元、新時代、新文明の夜明けとならねばなりません。

ヨーロッパにおける少數の人間が「どういふことをしよう」と決定するだけに、將來はかかつていゝのではない、アメリカにおける百萬の人間が「どうあろう」と決定することにもかかつていゝのであります。

附記

米國におけるMRAの發足について（一九三九年六月八日木曜日、議會議事録からの抜き書き）

ミズーリ州選出ハリイ・S・トルーマン上院議員（現大統領）の上院における演説

議長殿、六月四日の日曜日に、ワシントンの憲法館において道德的再武装のための全國大會が開かれました。私は當日、かの偉大な集會の開會の言葉となつた左の米國大統領からのメッセージを呈する光榮を擔いしました。

世界の基根となるべき力は、全市民の道德的氣骨の中に存しなければならぬ。従つて精神的再武装の世界的プログラムは、武力的闘争の危険を減ずるに役立つであらう。かくのごとき道德的再武装は、最も効果的であるためには、全世界的規模における支持を得なければならぬ。

フランクリン・D・ルーズヴェルト

かの大會は閣僚および上下兩院議員によつて發起されたものでありまして、同大會への招請狀には國務長官、陸軍長官、検事總長、下院議長、上院多數黨首領、フーヴァー元大統領、カンサス州選出上院議員（カ

ツパー氏)、ニューヨーク州選出上院議員(ワグナー氏)、下院少数黨首領マーティン氏等のメッセーシが含まれておりました。また前大戦における米軍總司令官ジョン・J・パーシング元帥のメッセーシも含まれておりました。それを私は朗讀します。

この精神的再武裝は、すべての心ある人士の支援を得なければならぬ。すべての眞の愛國心の根底には精神的熱情が横たわつてゐる。また、よき市民であることも同胞に對する高い道德的義務の念に依據するのである。今日かくのごとく世界平和を脅かしつつある事態に直面して、我々が祖先傳來の遺産に値しようというならば、我々は祖先の抱懷した信仰に再び我々自身を獻呈しなければならない。

ジョン・J・パーシング

同夕、主たる演説はオックスフォード・グループの創始者たるフランク・N・D・ブツクマン博士によつて行われました。また當日、大會に寄せられたメッセーシには、廿五名の英國上院議員によつて署名されたもの、二百四十名によつて署名された同國下院からのものがありました。オランダからのもの、南阿からのもの、英國労働組合からのもの、全世界の大外交家たちからのものもありました。

議長殿、私は英國からのそれらのメッセーシを本日の議事録中に記録することは、特に機宜を得たものと考えます。その理由の一つは、只今英國皇帝および皇后兩陛下がこの國に来ておられるからであります。理由の第二は、今申した署名者の中には、あるいは公けに、あるいは私的に、兩陛下と近い關係にある人が少なくないという事實であります。

私はこれらの文書が議事録の本文中に印刷され、それが上院文書として認定されることを要請します。

(上院文書第八十二號)

議長殿、私は只今議事録の中に、右大會に賛意を表して、全世界から發起人に寄せて來た澤山のメッセーシ中の若干をも挿入するお許しを得たいと存じます。(それらのメッセーシは署名人の名とともに全文が文書中に入れられた。その中の二つを左に抽出する)

英國上院議員から、

我々英國上院議員は、將にワシントンに開かれようとする道德的、精神的再武装の大會について祝意を表したいと思ひます。

國家的たると國際的たるとを問わず、融和と平和とは精神的に信仰と愛とをもつて裝備された人々および國々の間にのみ成長することができます。神の前に、この呼びかけに答える責任は、わが國における、また貴國におけるすべての男女の肩の上にあります。

上院議員廿五名の署名

英國下院議員から、

我々下名の英國下院議員は、ワシントンにおける精神的再武装のための全國大會に際して挨拶を送ります。我々は貴下らとともに、如何なる政治的または經濟的目的よりも根本的であるところの、そして我々兩國民にとつて共同の傳來遺産であるところの道德的、精神的原則に對する我々の忠誠を宣揚したいと思

います。

家庭および國家における神の主權的權威を認め、すべての同胞に對するキリスト教的責任感を基礎とする自由を確立し、そして無私、融和および信仰に基く國家的生命を打ち樹てゐることは焦眉の急であります。

ただ道徳的、精神的再武装を基礎としたときにのみデモクラシーは人類に對する約束を果たし、國家間における相互の諒解を創造することに貢献し、そして世界に再び平和をもたらすことができま

朝野兩黨を代表する二百四十名の署名

他のメッセージは六名の労働組合大會議長を含む英國労働の代表者からも、英國の商工代表からも、また北アイルランド議會の議員からも參つております。……（次いでオランダ内閣、スイス、デンマーク、フィンランド、ノールウェー、スウェーデンの國會議員およびフランス、トルコ、バルカン諸國の指導者等からのメッセージが披露された。最後にトルーマン氏は次の言葉をもつてこの演説の結語とした。）

議長殿、この節黨争とか、階級や政治哲學の争いを超越して個人および諸國民を結合しようとする何物かを見るのは珍らしいことであります。このような緊要な事柄に對して非常な反響のあつたのはまことに喜ばしいことであるとともに、文明の將來を少なからず左右するであろうと思われこの大目的のために、わが米國が十分の役割を果たすであろうとの確信を述べますことは、必ずや諸君全部の共感を得るであろうと信ずる次第であります。

新しい世界の豫告編

一九三九年七月十九日、カリフォ

ルニヤ州ハリウッド・ボールにて

今夕の催しは、私たちがみんなが夢に描いた新しい世界の豫告編であります。ハリウッドはそのためには最もふさわしい舞臺面であります。

M R Aは普通人が世界をつくり直す機会を與えるのであります。それは世界が必要とすることです。だから世界的に反響が起つています。

恐怖と不安定の暗雲は今、諸國の上に重く垂れさがつています。憎しみと恐れとは信頼の根底をくつがえし、希望を破壊し、いたる處で猛威をふるつています。けれども私どものすべては、指導者も市民も、永久の平和を渴望しているのであります。

しかし平和を渴望するだけでは十分ではありません。新しい精神というものがなければなりません。争いの原因に對しての戦いがなければなりません。利己主義と、貪慾と、憎惡に對しての戦いがなければなりません。この戦いに役割をもたないものは一人もありません。

M R Aは黄金時代のシナリオであります。——神を監督とする作品であります。——新しい世界の試寫であります。すべての家庭に親しまれているハリウッドは、M R Aのために各國に向つての共鳴板となることができます。

あの四つの標準を見てごらん下さい。勢いよく昇天して星にまでも達するではありませんか。それはM R Aの四つの標準であります——絶對の正直と、絶對の無私と、絶對の愛と、絶對の純潔とであります——個人的にも國家的にもです。それは個人的、國家的、國際的生命の四つの標準であります。

アメリカの精神的復興は、あなた方と私とがこれらの標準に正直に直面し、敢然としてそれに従うときに軌道にのります。

M R Aは勝利を得るでしょう。結合された心をもつて進むからであります。本當の愛國心

の火を喚び起すからであります。永久的平和の祕密を藏しているからであります。

この日ハリウッド・ボールに開かれたM R Aの「國民への呼びかけ」大會には三萬以上の大衆が參會し、他に入場できなかつたもの一萬五千を算した。そして四本の光の線がM R Aの四つの絶對を表象して空高く描き出されたのであつた。

新武器をつくらねばならぬ

一九三九年七月廿二日、第二次

M R A 世界大會の開會の辭から

前 書 き

M R A のための第二次世界大會は、世界大戰の前夜カリフォルニア州のモンテリー半島に開かれた。

同大會最終日の會合はサンフランシスコの世界博覽會場で催され、諸外國からの參加者たちはラジオをとおして世界に呼びかけた。メッセージも九名の總理大臣および二十カ國の國會の主なる議員からという風によくの國々から寄せられた。時の英國外相ハリファックス卿は次のような電文を送つた。

「私は M R A 世界大會への國民的メッセージに参加した數千名の英國人の挨拶に、私の分をも加えることを欣快とします。根本問題であるところの道義および信仰の原則を思想と行爲とにおいて改めて強調することは、ただに國民的幸福安寧をつくり上げるばかりでなく、我々が不安におそわれているこの

世界にあつて平和と繁栄とを希望し得る唯一の源泉であります。」

この年の七、八カ月にブツクマン博士の行つた演説の内容は前年スイスのインタラーケンで行つた演説内容を反映している。この間危機に對處するには人間の叡智のみでは足りないということは、ますます明らかとなつて來た。とはいへ、解決を求めようとすれば間に合つたのであるが、その條件は厳しく、戦争の原因は深く各國の人々の中に巢喰つていた。しかし永遠の眞理を基礎としたものには眼前の危機をのり超えて將來にまで及ぶ確實さが覆まれる。

一年前、我々は戦争の脅威の下でスイスのインタラーケンに會合しました。當時、世界の注意を釘づけにしていた考えは「導きか、大砲か」でありました。その後の月日は、ただこの何れかを選択しなければならぬという眞實性を深刻にするだけでありました。今や精神復興が如何なる世界的和解にとつても不可缺の基礎であることは、いよいよもつて明らかとなりました。

そこで各國の男女のとるべき措置はM R Aに参加して現在の危機を克服することでありました。非常な危機に臨むと、人間は極めて自然に神にすぎります。そして指導者たちが彼らを指導することを期待します。生死を決する宣言が發表されるゆゆしい時期に、人間は當然自分らがうけ

るべき報いを拂いのける何らかの力が働きはせぬかと、無理にも願うものであります。

我々は利己主義に對するこの世界的な戦いにおいて、史上空前の大戦闘を展開しているのであります。我々は新しい武器をつくり出さねばなりません。我々は過去をもとでに生きることはできません。今日、我々の政治のやり方を見ると、あたかも先祖の倉の中から出して來た遺物をつかつているように思われる。當時はすいぶん役に立つたであらうが、今となつてはすでに時代おくれで、我々をして敗北せしめ、無防備たらしめる古物のように思われる。我々は精神的武裝といたすぐれた力をもたねばなりません。我々は再建のために、名將をして名將たらしめるのと同じ特質をもたねばなりません——人格に加わる餘分のもの、世界を變え得る餘分のもものがそれです。

現下の事態は我々を唯一の健全支配、すなわち神支配のプログラムの一點に集中しています。私はある世界的大爲政治家との懇談に招かれました。彼は率直に「自分は氣の狂つた世の中に生きているのだ」といきました。彼は氣の狂つた世の中にあつて、正氣のものは、ただ神に導かれるものだけである、という偉大な眞理がわかり始めたのです。

我々は一つのことにおいて、みな一致しています——我々は變らねばならない、世界も變らねばならないということであります。もし人々が本當に變つて、そうして他の人々、他の國民を變えるに足る力をもつならば、それは我々のすべての問題に對する答となります。

我々はただM R Aにおいてのみ國家的安全を見出します。M R Aは世界再建の基調となるのであります。選擇は「導きか、大砲か」であります。我々は導きに心を傾けねばなりません。そうでないと大砲の音を聞かねばなりません。選擇は恐怖の渦まきと勝利の盛觀との間にあります。

忘れられた要素

一九三九年八月廿七日、ボストンからの世界放送演説

私は、人と人とを隔て、國と國とを隔てるすべての障壁を超越する共通の生き方をM R Aの中に發見し、かつM R Aこそは危機に對する唯一の、不變の救治であることを確信するにいたつた各國における無数の著名人および無名人の名において話します。

危機に對する答はあるのでありますから、それは公表されねばなりません。

危機は我々の失敗の表われです。危機が破局に達する前に、我々にはその原因を正視する勇氣があるでしょうか。我々自身がその原因なのであります。すべての國々の、そしてまた我々すべてのこれまでの生き方によつて、我々は今日このような羽目にもつて來られたのであります。

すべての國、すべての個人は現状に對して責任があります。

失敗の責は一ヶ國に歸せらるべきでなく、すべての國々のものであります。我々がみな悪いのです。何故なら、どこの國にも怨恨、分裂、破壊をかもし出す勢力は働いているからであります。國々も個人と同じように、互いに指をさし合つてばかりいて、自分自身のあやまちには目をふさいでいるのであります。利己主義の男や、利己主義の女が第一線の壟壘を必要にするのです。我々の國をも、その他の國々をも、非利己主義の波で洗うことが、戦争に對する恒久の答となります。

我々はみな平和をほしかつた。協約において、連盟において、同盟において、體制を變えることにおいて、經濟會議において、軍備縮小會議において、それを求めたが得られませんでした。我々は平和がほしかつたが、まだ平和の代價を拂つたことがない——我々自身や、我々の國が正しくなかつた點について神を仰ぎ見るといふ代價、また我々や、我々の國が、神の導きのまにまに、あやまちを訂正するという代價を拂つたことがない。

新しい精神は、他國の過誤を摘發する代りに、我々が自身の過誤について正直に陳謝するとき

に出で來ます。國も人も、つまり我々全部が、變らねばならぬという事實の中に和解の素地はあるのであります。今日のごとき危機に際しては、もし指導者が變るならば、國民を變えることができるのです。またもし人々が變るならば、指導者を變えることができます。

今日の危機は道徳的なものである。であるから、それに對處するにはM R Aの精神、すなわち正直、正義および愛の精神をもつてせねばなりません。M R Aは敵も味方も、他國も自國もおしなべて、すべての人間を變らせる力を意味します。諸君は豫期しない逆説をも、これで覺悟せねばなりません。

すべての人は自國に對して責任があります。國民がこぞつてそうせよと要求するならば、その國は正直な陳謝をして、過去のあやまちを改めるでありますよう。

すべての人は直ちに果さねばならぬ役割をもつております。すなわち、自分自身の「心の改變」を受け入れることができます。毎日、神の聲に心を傾けるべく決心することができます。そして憎惡と、恐怖と、貪慾から自由な世界をつくり始めることができます。

永續的平和のために必要な犠牲は、戦争が要求する犠牲にくらべれば物の數ではありません。

利己的な、恐怖に驅られつつある世界が活ける神の聲に聽くことは、まだおそくはない。外交において忘れられた要素は、神に平和のための計畫があるということ、恭従する人々をおしてその計畫を實行する手段があるということです。

神に對する忠誠は、すべての他の忠誠を超越するものであります。人類すべてが神に恭従するときに、個々の國はそれぞれ眞の使命を見出すのであります。それが本當の愛國心で、最高の勇氣を要すると同時に、最大の力を與えるのであります。

國の最も確かな防備は、隣國の愛と感謝であります。この精神において破局を未然に防ごうと努力し、萬人が要望する怨恨なき世界を建設しようとする爲政者は、各國民から全力をもつて支持されるであります。各國の爲政家やその他の指導者は、過去を正し、將來を建設する、この計畫に一致して従う用意があるでしょうか？

すでにこれらの偉大な眞理を知っている何百萬という人たちは、さらに他の何百萬にそれを分け與えねばなりません。今日この放送を聽いている人々が、M R Aを實行している何百萬の人々に神の聲に聽く方法を教わるならば、世界が變ることを早めるのであります。

我々は今、國家大な思慮と行動とを必要とします。我々が戦争をするのは、我々が平和をつくることができなからであります。我々は新しい紀元を目指さなければなりません。新しい人格、新しい家庭、新しい産業、および建設的なプログラムの力によつて、戦争と産業的不安を驅逐してしまふ政治の新しい型を指示せねばなりません。今こそ我々は、正しい平和——永久につづく平和の建設者をつくり出さねばなりません。

戦争の脅威は我々をして、これまで尊重して來たすべてのものを再検討させます。個人的に、國家的に神に献身することが世界的必要事なのです。賭けられているものは文明そのものです。未來は神の聲に聽従する人および國とともにあります。

世界の危機に答える世界哲理

一九三九年十月二十九日サンフランシスコとボス

トン放送局よりの國際放送

前 書 き

當日の辯士の中にはハリイ・S・トルーマン上院議員(現大統領)、リチャード・E・バード海軍少將、およびH・Hエルヴィン氏(一九三八年度全英労働組合會議議長、一九三九年AFL會議に英國労働代表として出席)があつた。

(一)

私は今日、この深憂に満ちた際に、M R Aを將來のただ一つの希望として、ますますそれに期待をかけつつある何百萬という世界の諸君に話しかけるのであります。特に私の念頭にあるのは第一線の塹壕内にある人たち、すなわち冷厳な現實に直面している人々、戦争が如何なるものであるかを體驗しつつある人々であります。

だが今日、第一線の塹壕はどこにあるのでしょうか。現に多くの國々においては、非戦闘員でも防毒面をたすさえないものはなく、庭園には防空壕の掘られていない處はない。これは新しい戦争の様相でありまして、この戦争においては、すべての人に責任があり、すべての家は前線の塹壕なのであります。

我々の和解の術は、戦争の技術の進歩と歩調をそろえて進むことができませんでした。今や、破壊の術は生きる術を追い越し始めています。前大戦後に通貨が暴落したように、我々の價值觀

念も轉落しつつあります。私の友人で、オックスフォードの大哲學者ストリーター博士は、「理智的に發育した民族は、道義的にも發育しなければ死滅してしまふ」といいました。

今日、我々は岐路に到達しています。人間が支配しようとする文明は崩壞の危機にのぞんでいます。長い間つづいた危機から危機への循環は、ここで終らねばなりません。各國は危機をのり越えて、平癒を見出さねばなりません。

新しい世界哲理が必要です。個人間、國家間の建設的關係をもたらし得るような世界哲理が必要です。この高められた考え方と生き方から、新しい爲政的手腕と新しい指導的能力が生れ出るのであります。

人々が活ける神から指揮を得始めるならば、この世界哲理は地上に現われるのであります。そしてそれは憎みなき、恐れなき、貪りなき生き方の中にあります。

憎悪と、恐怖と、貪慾の代價を考えてごらん下さい。人類は長い年月の間、假面をかぶつて生活して來たがために、今日、何百萬という男女は防毒面をたすさえなければならぬのです。何百萬という男女が、暗い都市の街路を手さぐりで歩かねばならないのは、諸國民が精神的燈火管

制の中に生きて来たからであります。何百萬という男女が、今日、空襲警報に耳を傾けねばならないのは、過去において、諸國民が神の聲に耳を傾けなかつたからであります。

危機のときが來ると、我々の思想と行爲の失敗が明らかにされます。そうすると我々は、血眼になつて即席案と便法とに走ります。時間とエネルギーの節約と、それから究極の失敗とは、我を驅つて神の支配の前にぬかずかせるかと思ひます。

人は今、人間の欲智が失敗に終つたことを認める段階に達しています。神に語つてもらいたいと願う心境は深まる事態になりつつあります。そのはずです。刻々に變化する、雲をつかむような、誰でもいやがるような新聞の見出しを眺めて暮しつつある人間が、絶望から逃れるには、それ以外にないでしょう。人間は事象を解釋し、形づくるために、何らかの適切な聲を必要としてゐるのであります。一時しのぎの便法は「導き」にゆずらなければなりません。それにつけて、「神の導き」は配給制度のない必需品ですから、闇夜に靜かに待つことも、あるいは「かくれたる患み」となるかもわかりません。

世界は答を待つております。戦争は諸國民の利己主義の代價であります。我々はすべての人が

手に入れることができ、すべての人によつて適用され得るような簡単な、實行可能な答をもたねばなりません。我々は適切な平和をつくるばかりでなく、それを維持するように訓練された人々を必要とします。多くの人は、自分らだけは個人的「戦争」をやつたり、とるに足らぬような享樂に耽つたりすることを許すような平和をほしがるという我儘があります。あるアメリカの主婦は、こういう質問を出しています。「今日、米國の利己主義と貪慾とは誰のせいですか。實業家に責任があるのですか。勞働者に責任があるのですか。それとも全米百萬の家庭にあるアメリカ氏夫妻のせいですか。」

新しい精神が興隆しない限り、我々は、我々の利己主義に對して將來まだまだ高い代價を拂わねばならないでしょう。ある將官は先日、私に「國のために自分の利己主義を犠牲にするか、自分の利己主義のために國を犠牲にするか、どちらかです」といつたが、それと同様に、我々は世界のために自國の利己主義を犠牲にするか、自國の利己主義のために世界を犠牲にするか、どちらかです。

最大の罪は、我々が十分の人生哲學をもたないことであり、生きることに對しての我々の

概念——樂を求める軟弱な、自己保存な氣儘な概念はまちがつている。我々は徹頭徹尾、新しい生き方の内容と概念とをもたねばなりません。個人をも、國をもこのように破壊するようになつたのは、永い間世界の頭腦と思考とがサポータージュされ、空費されたからにちがいないのであります。私は蔣介石將軍の「平時にもつと汗を流しておいたならば、戦時にこのように多量の血を流さずにすんだであろう」という力強い言葉を思い出さずにいられません。

我々はこれまで自分の欲するように考え、生きてみた。これからは神の欲するように考え、生きようと努めねばなりません。他人に生きてほしいと思うような具合に自分が生きるべきです。他の國に生きてほしいと思う、ような風に自分らが生きるべきです。そうすれば、我々の國は新しい世界秩序の先頭に立つてありましよう。

我々は平和について全く新規な考えの水準を必要とします。もしも平和が我々に要求するところのものが、戦争が我々に要求するところのものに劣らなかつたならば、とうの昔に戦争は地球から驅逐されていることでありましよう。

世界は憎悪と恐怖に對して、個人的にも國家的にも支拂い停止を宣言すべきである。各國內の

人々が永久的に個人間の戦争の状態にある間、我々は國家間に平和を打ち樹てることはできない。我々が生き方の考えと質とを一變しない限り、ストライキと、労働爭議と、戦争とは避けようがないのであります。

新しい平和協約は、すべての協約當事者、すなわちすべての國が無憎、無恐、無貪を基礎として生きることを前文としなければなりません。平和は、誰かがつくらねばならないのであります。平和は單なる抽象的觀念アイディアではないからであります。それは、人々が變るといふことです。我の多くは、相手が悔い改めることによつて平和をつくろうとしたがる。世界は、みなそんな風にしたがるのであります。けれども、我々は他國が先きに悔い改めるのをいつまでも期待するわけにはゆきません。M R Aの行き方は、「まずそういう自分から變つてみる」というのであります。

この協約にとつて必要な前提は、各國における各人が、將來、いつかは實現されるであろう休戦のときを待たずに、生き方の新しい質を只今直ちに始めることでもあります。そうしてこそ我々は本當の愛國者となるのです。そうしてこそヨーロッパにおいても、世界においても、諸君の心

の中に、諸君の屬する諸國の國境内に、法と秩序とが見られるであります。また、そうしてこそ我々は「これらの國々が如何に相愛しているかを見よ」ということができるのであります。子供にはこれらの大きな眞理がよくわかつています。毎朝、両親とともに神の聲を聽いている二人の子供から送つて來た手紙の一部を讀んで見ます。十一歳のケニーは「今が私どもアメリカ人のチャンスです。戦争がどうして起るかを僕は知つています。僕はよく姉さんと喧嘩をしましたが、議論をしたり、神さまのご命令と、神さまの四つの標準にそむくときに喧嘩が始まりました。ご機嫌よう。ケニー」といつております。

姉のアンからの手紙はこう書いてあります。「もし私どもが世界を變えようと思うなら、神さまのおつしやるとおりにするより他ないでしょう。そうでないと、神さまは世界を變える力を私どもに與えてくださらないでしょう。それには、子供るときには第一に、父母と四つの標準にそわかないことから始めることだと思ひます。子供でも、自分の國を變えようと思うなら、そうするより他ないでしょう。私どもは今すぐに始めなければなりません。そうでないと、戦争がすめばみな我儘をとおそうとするでしょう。私どもに力を與えることのできるものは神さまだけで

す。その力がほしければ、私どもはそれを得ることができません。」

これに對する私の言葉は「小さき童子に導かれる」という一言につきます。

鐘は神に聽くということにある。人間には獨力で平和をつくり出すことができないのです。我は將來の正しい、永續性ある平和の建設者を育て始めねばなりません。明日の平和建設者のために、世界いたる處において、精神的に再武装された平和促進者を育てねばなりません。

この機會に、M R A の呼びかけに應じてすでに成績を擧げ、影響絶大な貢獻された各國の諸君に感謝します。これらの明敏にして遠い洞察力をもつ人々は、M R A が最高の愛國主義であることを看とつたのであります。

M R A は各國の生命に絶對に必要な一つの新しい力を働かしつつあります。M R A はあらゆる争いにおいて、神を不斷の、そして最後の審判者とする新しい國家統一の焦點となるであります。本當に結合された國民は「指導する神」から生れるものであります。この哲理は國民精神の主動力となつて、磁石のごとくにあらゆる建設的力を集中することになります。それは資本と勞働に新しい結合を與えて、産業界の相刻と不安に答をもたらしことになります。家庭内にお

ける戦いにも、世界における戦いにも答をもたらすことになります。今日、破滅の瀬戸際に立つている世界を再造するという巨大な事業に堪える指導者をも訓練することになります。

(二)

只今こうしてしゃべっている私は、一秒の何分の一という極めてわずかな時間の内に、多くの國々に住んでいる友だち、前線の塹壕内にある友だち、ラジオの波を外界との唯一の連絡とする前哨地点の人々、遠い北方のスカンディナヴィヤ、インドの西北國境地帯、南アフリカの草原地帯、オーストラリヤ、ニュージーランド、蘭領インド、さらに地球上最も遠隔な隅々に住んでいる友だちにさえも話しかけることができます。

地球の果てへまでも、ラジオで運ばれる人間の聲を、我々は平凡のこととしています。科學の奇蹟は、この世紀の驚異であります。だが、それらの奇蹟のすべては我々の家庭へも、國へも平和と幸福をもたらしませんでした。我々の必要とするものは、精神の奇蹟なのであります。

その奇蹟とは、神意によつて定められた人類の使命であります。そう考えないものがあるでしょう。か。各國に、初期のキリスト教徒がもつていた信念と、火と、熱意とを具備する堅固な、決意に満ちた「神に導かれる人々」が出現したときにその奇蹟は現われます。現にそうした人々の出現は待望されております。廣がつてやまない、そうした人々の影響力は何ものも防げることはできないのです。もし各國に恐怖の手かせ足かせから解放された、個人的および國家的野心を超越した、神の導きに従う新しい指導者が出現するならば、新しい國家精神も、諸國民間の新しい協力關係も時を移さず生れることになります。

こうした哲理は古えの豫言者によつて國家の歴史的基礎として宣言され、幾世紀もの試練に堪えて來たものであります。預言者イザヤはいいました、「又なんちの子等は皆エホバ（主）に教をうけ、なんちの子等のやすきは大きいならん……汝をしらざる國人はなんちのもとに走りきたらん、此はなんちの神……のゆえによりてなり。」

ある大國の外相は、我々の必要とするものは預言者アモスのような型の間であるといいました。英國の勞働指導者は大會中アメリカの首都に M R A に關するメッセージを送りましたが、そ

の中に「我々は預言者ミカーの想像を現實化するような人を求める」という文句がありました。M R Aは預言者たちのメッセージを再び把握し、再び生氣を吹きこみ、再び生きようとしているのでありまして、すでに試みられ、試練され、確かなものであることが明らかにされたものがあります。

テレヴィジョンは、一つの偉大な眞理を指し示します。通常人も爲政者も、物質面におけるテレヴィジョンに對して、精神面において——一對をなすもの、すなわち「導き」を發見しなければなりません。ちようどテレヴィジョンが物質面において空間征服の遠視であるように、導きは精神面における洞見であります。そしてその限度は、我々にどこまで神に對する規律ある恭從が可能であるかという一事によつて決まるわけであります。

導きは、我々が神と相通するときにあります。改めて我々の心を神の方向にむけることの手初めは、喋ることの二倍聴くということです。どうして始められるかということに對する簡単な答です。だが、世界を自己中心の辯から引きはなす術はここにあるのです。というのは、自己が中心になると直ちに、個人の場合であらうが、國の場合であらうが戦いが始まります。恐怖も、

もう一つの要素であります。人は恐れているから利己主義に對して毎日々々戦おうとしないのであります。

導きは、精神的にも肉體的にも大衆を活かしてゆくための絶對的必要事であります。また、それよりは一毫も減らすことの許されない最少限の必要事であります。それは國家の血液であつて、それが絶えれば國は死滅します。爲政者たちが、この生き方の質を自ら生きるならば、神の心を國民の心たらしめることが可能になります。爲政者たちにこの質が缺けているとき、諸國民はその生得権を賣ることになるのであります。「もし、私どもが神に支配されないと、暴君に統治されるであらう」とウィリアム・ペンはいいました。

M R Aは偉大な中心的革命勢力であります。私もかつて心の中で戦つていたことがあります。十字架の體驗は、私を新しい型の革命家にしたのであります。

現在、我々は利己主義に對し史上最大の世界戦争を戦つてゐるのです。全員銃を執れ！我々は道徳的、精神的力を喚び起さねばなりません。我々は大衆を改變し得るような質のある生き方を生きねばなりません。過去數十年の間、そうした適切な行爲がなかつたために、今日、我々は

戦争のために高價な犠牲を拂わされているのであります。破壊の力に打ち勝つためには、今、我が建設しているよりも一層よく、一層賢く建設することでありませう。

神は世界全體のためにも、個々の國々のためにも、十分のプログラムをもつています。すべてのものに靈感と自由とを與え、他のあらゆる政治的プログラムに先行するものであります。我々の目的は、各人が生活に必要なものを十分に得るばかりでなく、この精神的復興を實現するために、みな正當な役割をもち、そうして自國および世界の平和を護つてゆくというのでなくてはなりません。かようにしてこの計畫に参加したものは、みな自分の手に合つた仕事をもち、それによつて社會的の、産業の、國家の安寧福利に對して影響力をもつことができるのであります。

交戦諸國が民衆の疎開を行っていると同じ規模と親切心とをもつて、失業救済のために一種の國家的動員を行わねばなりません。失業者には、「自分らは無用の人間ではない。またなすべき仕事もある」ということを知ることから生ずる安定感をもたせねばならない。かようにしてこそ各國はその全資源を活用し、眞の安全を見出すことができるのであります。

我々の眼前の必要事は、何百萬の人々が新しい世界のために計畫するというのであります。

單に幾人かの爲政者が會合するといつたことでなく、日々の生活と行爲を背景とする世界の結合された諸勢力が、利己主義に對する永續的戰爭を挑むことにおいて爲政者を支持することであり、ます。ここにおいて我々は初めて必要事の達成に近づき始めるのであります。

ある國の勞働指導者は、自分らの組織が一千萬の組合員を擁するさまを頭に描いていました。世界改造のために諸勢力が結合するというのであれば、活ける神からの命令をうける一億民衆という基準において考えることは當然であります。かくのごとくにしてそれらの諸勢力は、人間の心を動かして根本的に、その考え方と生き方とを變えるところの戰術と計畫とを豫め知ることができるのでありましょう。それらは他に類のない征服されることのあり得ない、不可抗の勢力となります。

舊教徒と新教徒、ユダヤ人と他の民族とを通じて動員し得る員數を考へてごらん下さい。明日の平和建設者のための平和促進者たり得る各地の精神的再武装者を考へてごらん下さい。MRAの門戸は萬人に向つて開かれております。何人をも排除するものでありません。それは「生き方の質」である。MRAは入會もできなければ、脱退もできない。それは「生き方」であります。

通常人も爲政者も、力を合わして自國の重荷を擔えというのが我々の呼びかけであります。各
自の關心事であればならない思考も、計畫も、生活も當然、爲政者が代つてやらねばならぬと
の考えから、責任はあまりにもしばしば少數のものに委託されて來ました。

我々は世界を再造しなければなりません。驚いてはいけません。それほど大きい仕事なので
す。男も、女も、子供もこのために動員され、すべての家庭はこのための城砦でなければならま
せん。神の聲に聽く體驗を始める無数の民衆の累積的影響によつて、新しい世界哲理は威力を發
揮することになります。勿論、それは單なる手初めの體驗にすぎないでしょう。動員されたから
とて、直ちに訓練ある戦士にはなれない。だが誰でも始めることができるわけです。

今こそ、利己主義に對する世界戦争のための戦士を募る好機であります。我々は不斷の戦士で
なければなりません。

我々は今、新しい世界秩序への閥まはを跨またごうとする刹那にあるのであります。

IV

アイデイヤの戦い

一九四三年七月、マツキノ島のMRA

中央訓練所開會式で行つた話

本日、私は世界に動きつつある大きな諸勢力についてしやべろうと思います。六十何年か前には、共産黨というものについては大して知られていなかった。まず最初にカール・マルクスという一人の人間があつた。それから長い間、共産主義者の小さいグループが存在したにすぎない。しかるに世界事情はついにカール・マルクスをして志をなさしめた。結果、今日の共産主義となつたのであります。

今日、世界におけるロシヤの意義を考へてごらん下さい。一體、ロシヤはどのくらい大きいか。地球の六分の一であります。私はロシヤ皇帝が六尺ごとに見張り人をおかないことには馬車

に乗つて往來することができなかつた時代を覚えています。鐵道で千マイルもの長い旅をするにも、彼はいつも沿線に見張り人をおいたものです。そうしたことも共産主義と稱するものを産み出すに與つて力あつた事情の一つであります。

わずかばかり前まで、世界は共産主義を格別、氣にとめなかつた。それは我々に何の影響もなかつた。我々がそれに接觸するということもなかつた。時々、線香花火のようにパツと火の燃え上ることがあつただけです。ところが、前大戦中に不平不満はますます募つた。革命が起つた。そして共産黨が政權を獲得したのであります。

今日のロシヤは、なかなかやつておりますし、米國は大いに彼らを援けております。ドイツを片づける上に、彼らは決定的要素だと考えられるからであります。また、將來においても、支配的勢力をもつようになるかと思われるからであります。

これが一つの場面であります。金塗りの立派な額ぶちをはめたらよいでしょう。また赤色もせいぜい使つたらよいでしょう。だがそうしたからといつて、それで共産主義が處理されたことにはなりません。そんな生やさしい勢力ではないのです。この國でそれに凌つて行かれたものや、

半分どころまでいつて思想的に左派といわれるものの數を考えてごらん下さい。今や共産主義は絶えず我々につきまとつているのであります。

もう一つの勢力をとりあげてみましょう。ファシズムというものについて我々が初めて耳にしたのはいつでしたか。一九二一年から二二年にかけてです。ここでもまた、最初にムッソリーニという一人の人間があつた。私はイタリアのミランへいつたとき、壁や塀に「共産主義萬歳」と書いてあつたのを覚えています。ところが間もなく、やはり壁や塀に「ドゥーチェ萬歳」の文字が見られた……共産主義に反抗する勢力としてムッソリーニが起つたのであります。彼はローマへ進軍した。そして政權を握つたとき、ファシスト勢力が生れたのでした。それから當分の間、民衆は安定と繁榮をだんだん力強く感ずるようになりました。彼らはいいました。「よかつた！ ムッソリーニが現われ、ファシズムが現われると汽車はダイヤどおりに動く。街に乞食はいなくなつた。いい秩序ができ上つた」と。ところが今日、ムッソリーニはどうなりましたか。イタリアはどうなりましたか。そして讃えられた「秩序」はどうなりましたか。

その頃、千九百廿年代のドイツは未曾有の衰退期にありました。多くの住民は食うべきものも、

否！何もなかつた。私は大きな財産のあるドイツ人たちが、固ゆでの卵を一つポケットから出して辨當代りにしたのを覚えています。何年かの間、崩壊と革命の危機はつづきました。青年層は全く放埒懶惰に流れて、いたる處で暴行を働き、盗みをしたがら國內をおし歩きました。

そこへ、極めてはつきりした思想をもつヒットラーという一人の人物が現われた。彼は牢獄に
いる間にその思想を本に書いた。出獄したころは群衆が騒いでいたし、秩序が亂れ、虐殺も行わ
れた。オーストリア人（ヒットラーを指す）はドイツ市民になつた。當時のドイツには秩序とい
うようなものはなかつた。ところが、このジッパガーノート（注）が現われて、秩序らしいものを與え
ました。世界における彼の地位は高められました。だからドイツ人は「ハレルヤー」と讃え、
「ハイル・ヒットラー」と叫んだ。それからさきは、ご存じのとおりであります。

かようにして共産主義とファシズムの二つの勢力があるわけですが、それらはどのような源
泉から湧き出たものでありましようか。すべてのイズムの母たるマテリアリズム（物質主義）か
ら生れたものに他なりません。それは腐敗と、無政府状態と、革命とを産み出す反キリスト教精
神でありまして、私どもの家庭をくつがえし、階級と階級とをかみ合せ、國家を分裂させるもの

であります。物質主義こそは民主主義の最大の敵であります。

これらが世界を支配すべく、猛威をたくましくしつつある勢力であります。

一九三八年に、私は「導き」を得て、M R Aは生れました。道義と精神とが、特別に強調される運動であります。現代の必要事は、道義と精神とであります。我々に課せられた仕事は、それが必要とする諸國民に、そうした現實をもたらそうとするにあります。私どもはロンドンのイースト・ハム公會堂でそういう考えを始めまして、爾來それを諸國にもちまわつていたのであります。M R Aはその年に生れました。

共産主義とファッシズムは否定的な、あるもの——物を分裂させる物質主義と混乱——の上に築かれたものであります。M R Aの行くところには、必ず建設的のメッセージが生れます。その目指すところは國民生活における指導力として神の指導権を復位させるにあります。

私の、ある誕生日にフィラデルフィヤ市で申したことを繰り返してみます。

「M R Aはデモクラシーをして機能を發揮させる各種の「質」をつくるものであります。それは單純で、非黨派的で、非宗派的で、非政治的であります。それはすべての人が必要とする

内的規律と、すべての人が希望する内的自由とを與えます。それは直ちに着手しなければならぬ活動のために、各個人の道徳的、精神的諸責任感を喚び起して、結び合わせます。

MRAはデモクラシーのために、活潑で、無私で、献身的である市民による確固たる體制をととのえるもので、その市民が結合を實現しようとする決意は、個人の損得によつて動かされることなく、また神の導きという恐慌の憂いなき體驗を人から人へと傳えることのできる人々である。」

アメリカは正しいイデオロギーを發見しなければなりません。それは祖先傳來のキリスト教的傳統から來るものでありまして、物質主義、その他すべての主義イデオロギイに對する戦いにおいてアメリカの唯一の答となるべきものであります。ところが、アメリカは物質主義を憎んでおりません。試みに考えてごらん下さい。もしアメリカが、他國の場合には非としてやまない力のために自身身が破壊されるとしたらどうですか。イデオロギーの闘争は新約聖書、舊約聖書の御影石でありました。しかるに今日は堅い御影石の代りに、さらさらの砂糖を與える人が恐ろしく多い。だから物質主義は救済されることがないわけです。

M R Aは何よりもさきに、まつしぐらに根本問題を衝いて、罪を指摘します。罪か病患であります。イエス・キリストはその救治であります。その結果は奇蹟であります。諸君はこのマッキノー島のような訓練センターへ来て、「オー、私は罪なんていうことを聞きたくない」というかもしれません。そうだつたら、まことにお氣の毒です。罪は指摘されねばなりません。ただ、それがどんなものであるかを知らせるに十分でさえあればよろしい。それがわかつたら、さきへ進んだらよろしい。そして諸君は直ちにそれに感應して、「改變する」だけの感受性があればよろしい。改變することが、またもう一つの奇蹟であります。昔、諸君の祖父母たちが、罪についてのかざり氣のない説教を好いたがために、水曜日の晩ごとに教會堂へ行つたように、今日も起り得るのです。諸君にそんな暇があれば、それに越したことはない——あるいはあせらずに、よく聞く必要があるかもしれない。いずれにしても、罪については最小の力説を期待してはいけません。最高を期待すべきです。だが、わかつた以上、速かに調整を行いなさい。變る、結合する、戦う——それが自然の順序です。

諸君がここで發見するものは、古い根本眞理ですが、ただそれが非常な強さで與えられるので

す。利己主義や便法が、個人および國家の常習である時代に、M R Aは絶對の標準を復活します。正直と、純潔と、無私と、愛、これが四つの絶對です。あるいは諸君の中にはそれらを大し尊重しなくなつてゐるものがあるかもしれないが、國民を武装させるには、こうした單純な、基本的の標準をぜひ與えなければならぬのです。

第一番に、正直ということを考えてみましょう。わが國の現状はどうですか。例えば軍需品契約などで不正を働いたものはどうですか。演職とか闇商賣などのために澤山の人たちを忙しい目にあわせ、國民に巨額の負擔をさせてゐるではありませんか。昔は不正直をよくいつたものはない。今日はどうかといへば、不正で大儲けをした人間は、殆んど珍重がられるかの觀があるではありませんか。

次に、純潔ということを考えてごらん下さい。それは、個人問題だと諸君はいうかもしれないが、わが國の現状をよく見てごらん下さい。ある軍需工場などでは不純潔はあたりまえになつていて、職工の間に組織化さえもされてゐるといわれ、特に破壊的分子はそれを暗躍の武器としてゐるのです。それらの人々は、民衆の風紀がかき紊されれば、その思想も混亂することを知つて

いるのです。しかるに國民は「困つたことだ」とつぶやくだけで、相變らず日曜ごとに教會へ行く。何の變化も起らない。國に偉大な淨化力をもたらそうとする人は、あまりにも少ない。もし、それをもたらしものが全くなくなつたら、國はどうなりますか。破壊された家庭、安定を失つた子供たち、文化の頽廢、革命の苗床！

無私と愛はどうですか。無私であろうともしないし、そして愛をもとうともしない。

多くの人はこの四つの標準は、馬車時代の遺物ぐらゐに考へている。だから國家として、そのよゝなことを問題にしようとしなさい。そのおかげで、世界の現状はこんなことになつたのです。今、もし諸君が、人々をしてこれらの絶對に忠實ならしめることができるならば、諸君はある力、すなわち何ものも反對することのできない創造的な、あるものを國內にもつことになります。道義を強調する他に、イエス・キリストの救いの力ということをお忘れはなりません。そのことがわかれば、ほとんど忘れられてしまつた原動力——聖靈を體驗するでしょう。聖靈こそは、諸君に「導かれた答」を與えて、神の明瞭な直接の聲として、何をなすべきかを教ふるであります。

それが今日、教會にとつての與えられた役割であります。私は心の底から教會に、革命の炎に燃える教會に期待をかけるものであります。我々はまだ必要な精神的革命を體驗し始めません。我々は革命を必要とします。そして諸君が神の明らかな光の前に立つたとき、光輝ある精神復興スピリチュアル・リバイバルを體驗するでしょう。諸君はキリストが、この古い世界をどうしようと思つてゐるかを了解するでありますしよう。

これらの現實を知るということは一事である。しかしそれよりさきに、もう一つのことがある。それはこれらの現實を國家大にすることでありませぬ。

諸君の中には困つた人がある。あまりに理想的で、その希望は決して實現されない、自分の家族間においてすらも實現の見込みがない、というほどの理想家であります。國際連盟もそうでした。人々はあまりにも「連盟心理」に没頭して、連盟が最も必要とした事柄、すなわち「變化」をもたらしべき個人を相手としての準備工作といふことをしなかつた。連盟からは大切な、あるものが除かれていた。それは神である。國際連盟はついに神を戴かなかつた。

各人の任務は神を奉戴する最優案を見出すにあります。それが見つければ、我々のためのみな

らず、戦後のヨーロッパのために最優案を得ることになるわけです。ただ厄介なことは、露政者をして、我々に代つてすべての思考をさせておいて、それを我々がデモクラシーと呼んでいることです！

諸君は自分の都市について考えてごらん下さい。あの指導者は破壊的だとか、どの指導者は破壊的だとか不平をいうが、そういう破壊的指導者を可能ならしめるものは各人の利己主義ではありませんか。進んでそれを矯正しようとせず、退いてそれを我慢しようとするところに缺陷がある。祈る代りに金で解決をつけようとしている。自ら改變して答を得るよりも、混亂をつづけ、つぶやきと不平をつづけようというわけです。

アメリカのための戦いは、アメリカの人心のための戦いでもあります。國そのものが荒廢に歸する前に、國民の思想が荒廢に歸するのが常でありますが、アメリカの思想は、すでに荒廢の中にあります。

アメリカ人は、左派であり、また右派であるということの問題にして迷っているが、我々が本當に必要とするところのものは、神の聖靈に導かれるということだけなのであります。それが我

私の研究しなければならぬ「力」であります。それが得られれば、我々は混沌に終止符をうつべき光明を得ることになりましょう。聖靈は我々に如何に考え、如何に生くべきかを教えると同時に、國家に奉仕するの具體的基礎を與えてくれるものであります。

アメリカは祖先傳來の道義的遺産の大部分を失いました。もし我々が道德的氣候に重きをおかなかつたならば、我々のデモクラシーがどういうことになつてゆくかを考えてごらん下さい。我のあるものは、自分のことにかかりきつたために、國のことに注意するのを忘れて來た。もしアメリカが正しいイデオロギーを回復しないならば、我々の前途に待つてゐるものは混沌だけである。我々の運命は神の導きに従ふこと以外にはありません。

今日、世界における眞の戦線は階級と階級の間にあるのではない。民族と民族の間にあるのではない。戦いはキリストと反キリストの間にあります。汝の奉仕せんとするは何れか、この日をもつて選べ！

注 インド神話の主神の一つヴィシュヌの第八化身たるクリシュナの神像。この像は祭禮の際、善美を

つくした大きな車にのせて市中を引きまわすのであつたが、この車にひき殺されると極樂往生が得られるとの迷信からヒンズー教徒の中にはその下敷になつて死ぬものがあつた。轉じて人身御供を要求するものを意味する。ブクタマン博士はその意に使用しているのであるが、うまい使いかたである。

善い道

前　　言

この演説は一九四七年六月四日、ブックマン博士の第六十九回誕生日に、スイス放送局の懇請によつて同國コゝから世界に放送されたものである。まず英、佛、獨、伊、西、葡の諸國語をもつてヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカおよび極東に送られ、さらに中繼によつてビルマ、中國、マレー、インド、オーストラリヤ、ニュージラランドその他に送られた。

米國においてはニューヨーク選出下院議員ジエームス・ウォッツワース氏によつて六月十日の議會議事録に讀み入れられた。

左の陳述は、米國南極機動艦隊司令官リチャード・E・バード少將がこの演説を米國の聴衆に紹介したものである。

「ブックマン博士の誕生日に當つて私の心からなる祝辭を申述べます。

私の見るところによりますと、フランク・ブックマンと數多いその一黨の人々は靈感をうけた人々であります。もし皆さんがこの人々のしていることを正確に知ることができたならば、彼らの生涯が、世界における平和と、協調と、好意という大義に全的に捧げられていることがわかると思います。これらの男女およびその家族は自我をすてて献身してゐるのであります。彼らは家をすて、身の安定をすてて世の中へ進出しているもので、報酬なしで働いてゐるのであります。その態度は古えの使徒のそれに類するものであります。

お互いに見てゐるとおり、世界には澤山の少數者が、純然たる利己的目的のために強い團體を結成してあります。しかるにこの團體のみは「善」のために献身してゐるのであります。彼らは二千年以前キリストが教えたことを實際的方法において具現しつつあるのであります。すでにこの團體の影響力を感じ始めている國は非常に多くなつて來ております。我々はこの世に「悪」があり、その惡の故に多大の惡意があることを知つています。しかし私は、世間には惡意の量よりも善意の量の方が大きいと確信します。しかるにもかかわらず、世界は利己主義のために名狀すべからざる苦痛を経験させられ、今なお經驗しつつあるのであります。というのは、善意の人々は減多に組織の才能を現わさないのに、利己主義的の仲間は糾合し組織する才能を働らかしたからであります。そこで惡意が人事を支配する場合がありますにも多く、殘酷とか、難儀とか、絶望とか、飢えとか、混沌とか、戰爭とかの形において恐るべき結果が生じ、それが

さらに悪の勢力に力を加えることになるのであります。

ところがMRAはどうかといいますと、全世界にわたつて善意を糾合しつつあるばかりでなく、悪意の人をも變えて、善意の支配する世の中にしようとしているのであります。人類が再び武器を執つて戦うことなく、神意を奉ずる仲裁の卓上において問題を解決する道をえらぶ世の中にしようというのであります。

現代が物質主義時代であつて、人間の智能が主として物質的科學の發達にそそがれて、精神や人間關係の學問が等閑にされて來たことを我々は知つております。MRAはそれに對する答をもつているのであります。實際、世界的善意を創造することによつて人間の危險極まる利己的慾望、野心、貪慾を溶解しなかつたならば、どうして人類はこの原子力時代に處することができましようか。

今、世界を擧げて人々は當惑と混迷の内にあります。どうしてよいか、わからないのであります。フランク・ブックマンはそれに對して答を指示するものであります。彼とその一黨の人たちは、皆さん善意の人々が何とかして達成したいものだ并希望しておられることのために全世界にわたつて健闘してあるのであります。私はできる限りの力をこめて力説したいと思ひます——この運動こそは、測るべからざる災厄から文明を救うべき行動に出ようとして、皆さんが探し求めつつあるチャンスを提供するものである。』

いたる處、人々は安全へ導くであらう善い道を見出すべく努めております。すさまじい恐怖は

すべての人々につきまとい、世界中に蔓延しつつあります。國際會議は次々に開かれるけれども、平和は一寸も近づきません。脅威に満ちた經濟問題は新舊兩世界に直面しています。日なお淺き國際連合は諸問題の重壓の下に、そしてそれらの問題に處すべき適切な精神を缺くがために、たわみつつあります。人々は指導者への信賴感を失いつつあります。眞面目で有能な爲政者たちは懸命になつて努力するけれども、收穫のめどを見ることができません。

ある人々は次の戦争を目やすにして考えています。もし、彼らが本當にそのような答を考へているならば、健全な精神状態にあるものとは思えません。けれども、もし次の戦争が現状から遁れる唯一の道ならば、その惨害を甘受しようとしている人々があるのであります。

しかるに他方において、破壊的勢力は禿鷹のように、人類の幻滅感をむさぼり食いつつあります。のみならず、自然力さえもが帳尻に赤い答を與えつつ、破壊的勢力とぐるになつてゐるかに見えます。

どちらを眺めても目に入るものは分裂です。分裂が現代の特色であります。一團の人々は他の一團の人々に敵對します。それらは他國の、他民族の、他階級の、他黨の人々だという理由で。

あるいは、單に見解を異にするからという理由で。

誰しも平和と秩序を希望しないものではありません。しかし、分裂に導く見解のために争つてい
ては、ただ混沌を増すばかりであります。一體、我々の最大必要事は何でありますか。

あるヨーロッパ人は最近こういうことをいいました。「我々は飢えている。單に食物だけでな
く、思想に飢えている。我々の個人的および國家的生活様式をつくりなおすための基礎とすべき
思想に飢えている」と。

我々の問題は、経済や政治よりも深いところにあるというのが真相であります。すなわち、イ
デオロギー的なのであります。今日、分裂に導くところの幾つかのイデオロギーは人心支配を目
指して力争しつつあります。そして無数の人は、他に確信を與えるものが見えないために、それ
らの傘下に投ずるのであります。政府部内にもイデオロギー的心構えが最も大切なことがわから
ずにいる人々があります。物質的に強力な國でイデオロギー的に分裂することがあります。そう
いう國は危険に瀕しているわけです。この事實を無視する指導者は我々を空賣りしてしまいます。
道はあります。澤山の偽りの道の中に善い道があります。それは神のつくつた道、聖靈にふれ

た民主主義的イデオロギーの大公道であります。それはどの國にとつても、たしかな道であり、世界平和にとつて缺くべからざるものであります。

人々は今日、意識的に、または無意識的に一つの新しい考え方の型にはめられております。そして、いたる處で彼らは「共產主義に對する答があるか」と質問します。

その答を發見しようとして空想的に、大膽に、あるいは哀れとさえ感じられる努力をしている人々を見るのは興味あることであります。また他の人々の中には變化が來なければならぬと漠然考へ始めているものもあります。そういう場合には誰でも、どの人、どの國が變らねばならぬといいますが、自分自身が徹底的に變る必要があるということには滅多に氣がつかない。しかし、今の時は徹底的行爲の時であります。そして人の性質は變り得るものなのであります。

一人の軍人は、最近M R Aの會合に出席したあとでこういいました。「私は今まで、自分はブラウン少佐アイズラーだと思つていました。實際には變化少佐アイズラーと差し向いの無名氏であることがわかりました」と。

この軍人は善い道を、心の改變という道を發見したのでした。我々がこの道を歩めば、そこに

奇蹟が起り、再^レ生も眞の安定も順々に出て來ます。

一人の製鐵工がこのコーの中央訓練所へ參りました。廿八年の間共産主義者だつた男であり、自分の娘を共産主義者として訓練した結果、娘は父よりも過激になりました。ところが娘は改變して、父にコーへ來るようにと勸めたのでした。さて、彼は私たちに別れて歸るときに自作の詩を朗讀しました。こういう詩です。

私は熟察して、畏^{おそ}れのうちに額^{ぬか}づく

神の偉大なる設計の前に。

私は絶妙の奇蹟をながめてゐる——

利己的人の内に起つた變化。

ダン・ジュ・ミディ嶺上の雪は

神の恵みの衣にすぎない。

神に設計あり、萬人のために、

一人としてその中に地歩なきはなし。

この製鐵工は今、こういう手紙を書いています。「私はキリストにおいて新たな生きものになりました。そしてユーにおける體驗は、神に對する私の忠誠を永久に封印しました。何によらず精神的なことを筆にするのは、幾年もの間、これが初めてです。というのは、過去廿八年の間、私のペンと才能とは、マルクスの物質主義にかけた私の信念を宣揚するために捧げられて來たのです。」

信念の壁を、最も暗黒な際に處するためにも確實な答として與えるならば、人は必ず新しい希望をいだくものであります。その偽りでない證據が——時々新聞などの見出しの中に、さらに多くの場合においては、見出しのかけに——堆積されつつあることに對して、私は神に感謝します。

私はただ今、AP通信社の有名な時評記者デヴィッド・マッケンジーが自分の經驗中、最も驚嘆に値いすることの一つと銘打つた一文を手にしてもいますが、彼はその中で、中國の第一流軍人

政治家の一人が自國のためにつくり上げつつある驚くべき新計畫について語っております。戦時中、中國の參謀總長であり、現在、國際連合の軍事參謀委員會に自國を代表しつゝある何將軍は、悲劇的な自國の分裂に心を痛めながら、アメリカに開かれたM R Aの會議に赴いたのであります。彼がそこで見た新しい眞理はこうでした。曰く、「過去廿年にわたる中國における反物質主義抗争で私のとつたゆき方は、武力に對するに武力、組織に對するに組織であつたが、今、私は思想に對しては思想をもつて戦わねばならぬという實に確固たる結論に達した」と。

何將軍は今、中國の道德的復興を第一位にしているのであります。彼は經濟改革とともに、中國に新しい標準を與えるであろうところの道義的力が進まねばならぬと信じている。要するに、露骨な武力のみによつて共產主義者を改心させようと努めるのは無益である。道義の力によつて共產主義の問題を解決するのが最善の方法と思われる、と將軍はいうのであります。彼は共產黨をも國民黨をも含む全體としての中國社會の道義的水準を高めることの重要性を強調するであります。

そうした目的を達する準備として、彼は自國の政府に、M R Aにおける訓練のために選拔され

たものを直ちにスイスとアメリカに送るようにとの詳細なる建議書を提出しました。彼はその中において、選ばれるべき人たちが天性非利己的であり、身體が强健であり、信念の人であり、またこのイデオロギーを自國に擴めるために歸國後、少なくとも一カ年は奉仕しなければならぬ旨を強調し、さて最後にこういう注意すべき言葉をもつて結びました。「世界に秩序を與えるには、まず以て國家を整頓せねばならぬ、國家を整頓するには家族を整頓せねばならぬ、家族を整頓するには一身の品性を涵養せねばならぬ、すなわち各人はまず第一に、自分の心を正しからしめねばならぬ」と。

まことに爲政者にふさわしい設計で、今日あまりにも多くの國々を脅かしつつある兄弟相剋の抗爭の解決に向う新しい近より方を示すものであります。

安定なきヨーロッパのまん中にあるコーに、またアメリカのマッキノー島にイデオロギー訓練の中心がありまして、そこを訪れる普通人や爲政家の數はますます増えつつあります。それらの人々はそこで新しい希望と、混亂から脱出する道とを得つつあるのであります。去年の夏パリの平和會議から歸りがけの爲政家の一人はいいました。「パリへの答をコーで見つけた」と。

今日、相當に混亂状態にあるインドは、代表として幾人かの指導者を送つて來ました。その一人は聯合州の農務長官であります。こういいました。「二つの主なるイデオロギーがインド民衆の心を捉えようである。一つはカール・マルクスのイデオロギー、他はM R Aのそれである」と。インドの諸新聞は問題の核心をつかんで「共產主義への答、コー」と見出しに表わしました。

石炭は經濟界の主なる問題の一つであります。英國の大炭坑でコーに代表を送らないものはありません。英炭坑にとつて最も危険であつた年に、それらの指導者は國へ歸つて争議を解決し、生産量を高めました。新しい精神のために、より多量の石炭が出て來たのです。それらの炭坑夫は生産を増したばかりではありません。楽しい家庭をもつことになりました。

一人の英國下院議員はいいました。「自由と好意の新鮮な風がコーから荒廢した國々の上に吹いている」と。今日、この人は議員委員會を組織して、諸國民の道德的、精神的再生をはかることによつて平和を確定的なものにする目的をもつてここに會合すべく、諸國の政府代表を招いているのであります。労働は今、多くの國において指導的地位にあります。もし、労働が神に導かれるならば、世界は結合され得るでありましょう。

軍の指導者もまた自分らおよび配下の人々の勤むべき新しい役割が目につきました。それは、靈感にふれたイデオロギーという新しい力を速かに自國に提供し得るということであります。

そうしてありがたいことに、今や、イデオロギー的に装備された民衆は、世界的勢力となつて働きつつあることです。彼らは自分の身の内に起つたことの故に、新たな道德的氣候がつくり出され得ることを知つてゐるのであります。職工も兵士も、主婦も爲政家も、農民も工業家も、若いものも年よりも、彼らは新しい紙上計畫を提供しようとしてゐるのでなくて、否定されることのない體驗をもつてゐるのであります。彼らは人間の心が變り得るものであることを知つてゐる。神からの確然たる、決定的な導きが今も昔と同じく、得られるものであることを知つてゐるのであります。

二週間前、私はローマに参りましたが、それは十五世紀にこのスイスに住んでいた當時の一爲政者ニコラウス・フォン・デヤ・フリューエを聖人として宣布する式に参列するためでした。ニコラウスは神の指導の賜物を持ち、そのままに行動して自國の救い主になつたのであります。彼は勤勉な農夫であり、戦士であり、またお奉行さまでもありました。五十歳のとき、戦いに寧日

なき世界に歸々とした彼は、多大の犠牲をはらつて神の指導に極めて従順に従うことにしました。靈感にふれた彼の良識、人間についての知識、および心の純潔さは、間もなく彼をしてスイスにおいてのみならず、ヨーロッパ全體において、時人の尊敬を博するにいたらしめました。彼は諸人が最も熱望する國務裁定者の地位を得ました。スイス諸州間の確執が甚だしくなつて、今にも内亂になろうとしたとき、神から授つた彼の答は、スイスを結合への善い道にのせたのであります。五百年前に生きた、そして神の言葉に耳を傾け、敢然としてそれを時人に分け與えたこの爲政者が、今日にいたつて最高の表彰を得たことは、まことに時の宜しきになつたもので、彼は現代の聖人、國際連合への模範なのであります。

神に率いられる外交家——結合された國。答はそれで宜しいか？

アラビヤの外相はいいました。「世界は岐路に立つている。一路は革命と混沌とに導く。一路は反動と失望とに導く。M R Aは第三の道である——世界を結合するであろう神靈にふれたデモクラシーの道である」と。

靈感にふれたデモクラシーのイデオロギーこそは、正に生活に活かすべき生であり、歩かねば

ならぬ道であります。全面的に新しい爲政的手腕が要求されております。善政を念とする大臣たちは、國民を變えねばならないのであるが、普通の内閣は大概の場合その術をもつていない。

國民が變れば、國は新しい生活の水準を發見する。そうなれば、あらゆる問題は自然に溶けてしまします。

國民が神に聽き、神の命に従うならば、國は素地のままの神の意思を政治とする術を發見します。

ここに善い道が、誰でも歩いてよろしい、誰もがその道を歩かねばならぬ——普通人も爲政者も共に。我々がその道にのるときに、神は現實となります。恐怖は雲散霧消して生が展開されます。この善い道には紆餘曲折はなく、ただ一直線に前方にのびていたのであります。

汝が右手にまがり、そして汝が左手にまがるとき、汝の耳はうしろから、「それが道である、そこに歩め」という言葉を聞くであろう。

國々は汝の神たる主の故をもつて、汝の許に走るであろう。しかし汝の子らの平和は偉大であろう。

危機に對する答

一九四七年七月十五日、コロにお

けるM R A世界大會の開會の辭

世界は、擧げて答をもとめております。もし直ちにそれが與えられないならば、ただどの國と
いうようなことでなく、すべての國々は壓倒されてしまふだろうという容易ならぬ時局に、我々
は到達しているのであります。

あまりにも長い間、我々は問題に滿ちた寡圍氣の内に呼吸して來ました。我々は會議から會議
へとさまよいながら、根本的解決の望みをなげうつております。我々は成功を信じなくなつた。
個人的にも、國家的にも失敗の奴隷になりきつていたのであります。

各國は答をもたずに、答の成果を翹望しています。生産がほしい、平和がほしい、繁榮がほし

い、世界組織がほしい、結合されたヨーロッパがほしい、新しい國民生活がほしい。だが一向にこの根元を衝こうとはしない。

適切な答を與えることなしに、ただ際限なく危機を叫びつづけることはできません。危機の習慣は無感覺の習慣を産みます。我々は人類を今日の恐怖の濃霧と、悲痛の泥沼の中から新しい平地に救い出さねばなりません。

國々の問題がうまくいかないのは、ただ夢中になつて經濟計畫をもつて道德的無感覺と取り組もうとするからであります。經濟的崩壊は、すべての爲政家および市民の心を貫きつつ、まつ黒な脅威となつて横行しております。しかし物質的危機はその底に横たわる物質主義と道德的崩壊とを覆いかくしているものだから、彼らにはそれを療治する方法がわからないのであります。

我々が國家的規模において人間の性質を徹底的に處理しない限り、各國は暴力と破壊への歴史的道を歩まねばならないであります。

問題は國と國とをへだてる單なる鐵のカーテンではない。人と人とをへだて、すべての人を神の支配からへだてる鋼はたらのような冷酷な利己主義なのである。しかし人が神に聴き、かつ従うなら

ば、鋼も鐵も溶け去るでありましょう。

一世代前、一つの物質主義的イデオロギーに捉えられた一團の人間は、それをもつて世界を掌握しようとした。彼らはその事業に献身して、世界的戦線を張りつつ、廿五年の間寝てもさめても、休みなく、巧みに、容赦なく働らきつづけました。

民主主義諸國の爲政家たちは急に目をさましました。目をこすりながら、あたりを見まわしました。物質主義の世界的勢力は、すべての國に浸透して行きました。學園にも工場にも食い込んでいました。彼らの事務所にも政府部内にも侵入して行きました。彼らの家庭にも、同僚にも、彼ら自身にさえも影響をおよぼして行きました。

危機の迫っていることが、やつと彼らにわかりました。世界の混沌と支配とを目指して進軍する組織された物質主義が、大きな進歩を示していることに気がつきました。彼らはいぶかりながら、「これはどうした情勢か、どうしてこんなことになつたのか」といいます。

理由は簡單であります。多くの人々が眠っている間に、またその他の人々が自分の仕事にばかり没頭している間に、物質主義者らは哲學と、熱意と、計畫とをもつて營々として彼らの革命を

育てて來たのです。

それに對する答は何ですか。一世代前、M R Aの勢力もまた戦いを始めたのでした。世界的戦線にあつて、計畫には計畫をもつて答え、思想には思想をもつて答え、戰鬪的無神物質主義にはデモクラシーの戰鬪的敬神イデオロギーをもつて答えて來ました。

思想は食い入りました。人間は再造されました。それは一國また一國と影響のあとを残しました。そしてそれは、今や全地球に帯かけしています。

今日、このコーに開かれたM R Aの大會において、我々はこの勢力が直ちに役に立つ答をもつて行動しつつあるのを見ます。爲政治家たちが時のおそきを覺り出しているときに、M R Aは廿五カ年にわたる勞作の成果を氣前よく提供しているのであります。思想の戦いにおける一勢力、神の下に爲政治家をも普通人をも諸國再造のために適切なイデオロギーをもつて武装させ得るところの訓練と體驗とをもつ一勢力、今ぞ！

新たなメッセージはコーから悲嘆にくれた世界に送られます。答はコーで發見された。その答には脚が與えられて、今、行進を開始しております。この地で我々は危機時代の終點に到達し

て、救済の時代を開拓しようとしているのであります。

今日、世界の大問題である石炭の生産という問題をとつて我々の答をテストしてごらん下さい。「英國は石炭を増産しなければならない。しからずんば英國のために半夜の鐘は鳴るであらう！」と閣員たちはいいます。今週、石炭廳は、石炭の産出量は全國的にいつて政府の定めた量より大分少いと發表しました。ところが坑夫をコーに送つて訓練をうけさせた炭坑、およびMR Aの劇「忘れられた要素」が上演された炭田地方では、話はまるで別です。ある炭坑のときは四日半で六日分の量に達した。もう一つの炭坑では出炭量が頻繁に定量を超過するので、坑夫側から定量を高めるようにとの申出がありました。また、ある地方では缺勤率は十二カ月の間に廿パーセントから三パーセントに減じました。

紙上計畫が生産を高めることはないでしょう。ただ新しい人々がイデオロギーの火をもつて新しい精神で協力するときのみ生産は高められ、たのしい家庭から湧き出るチーム・ワークは打ち樹てられ、國家は回復への軌道にのせられるであります。

もう一度この答をテストしてごらん下さい。先週末、あるインドの労働指導者がコーへ参りま

して、執拗にインドにつきまとう二つの問題、人種的悪感情と階級的悪感情とについて語りました。彼の見るところでは解決のめどはないということでした。一日たつと、彼は答が見つかったといいました。その次に來たとき、彼はこういいました。「問題は道義的無感覺にあるのですから、答はM R Aです。私はここで悲劇なき生活方式を見ました。この方式を自分のものとするとき、私の生活は効果的になるし、他のものの生活をも効果的にすることができます。それが我々インド人にとつてのチャンスです。我々の一人々々が大勢をつくり出せます。數千人は數百萬人をつくり得ます。世界が悲劇から救われることは可能です」と。

彼の言葉は世界を救い得る政治手腕への鍵であります。それはどこから着手すべきかを教えるものであります。M R Aはすべての人、すべての國のためなのであるから、誰でもそれにならつてよいわけです。人間の性質は變えられるものです。それが根本的の答であります。國家の經濟は變えられます。それは答から生ずる成果です。世界歴史は變えられます。それは我々の時代の運命です。

正直に事實を正視しようではありませんか。新しい會議を開いたとて、偽りの哲學に對する答

にはなりません。新説を出したとて、戰闘的イデオロギーに對する答にはなりません。計畫が失敗に終るのは、靈感にふれたものが實行にあたらなからです。しかるに、計畫だけは次から次へと繰り出されます。コーでは計畫を實行し得る靈感にふれた人間がつけられるわけです。

一人の爲政家がコーへ参りました。その人はその國の商務長官ですが、何年もの間、彼の日常は英國人に對する憎惡心によつて友配されていきました。その感情の猛烈さは二度と公式の場合に英語をしやべるまいと誓つたほどでした。

ところで、あるとき、彼は一連の事件にかかり合つたが、それは自國を、極めて容易に内亂に導き得るような危機にもつていつたのであります。そのときのことを彼は私どもに英語でこう話しました。「時々白熱化するほど強い憎惡心も、神の——といつても當時、私は神を知らなかつたし信じもしなかつたが、神の奇蹟を行う力を知ろうとの誠意さえあるならば、一瞬にして除き得るものであることをこの身に經驗しました」と。彼は正直な謝罪が正直な平和を勝ち得るといふ秘訣を知つたのでした。そのために目の前にせまつた内亂をさけることができました。この爲政家の内に起つた變化と、神の導きとは、自國內の分裂的分子としての彼をして、協すゝめ力の先

覺者にし、自分の種族のためにも、他の種族のためにも効果的に生きる道を教えたのであります。心の變化。靈感にふれた政治。憎悪と分裂に對する答。我々がひとしくさがし求めている答はこれでしょうか？

M R A は世界と世界の爲政治家たちに訓練され、前進しつつある力を、個人的および國家的利己心に對する答をもつ力を提供しています。それはどこに住む誰でもが、今日只今、新時代の新規な段階に踏みこみ得るチャンスです。それは理論ではなくて、生の様式です。あらゆる條件の下にテストされた様式です。それは崩壞の一步手前にある社會を再造し救済する實力をもつところの一勢力であります。

南極から歸つたバード提督は M R A についての所信を要約していいました。「私はできるだけ力をこめて強調したいと思ひます。M R Aこそは文明救済のための行動に出ようとして人々がさがし求めつつある唯一のチャンスを提供するものである」と。

生れ變つた人たちは、今、諸國に精神復興（メンタル・リバイバル）をもたらしつつあります。その中心に M R A の力をもつ産業は、萬人の必要に應ずるだけ生産するであります。日常の生活にこの力をもつ家庭

は、次の世代を混沌から安固たらしめるであります。この力をもつ軍隊は、道徳的訓練の新しい標準を國民に與えるであります。大臣や外交家がこの力をもつたならば全面的に有能になりましょう。敵を變じて友とする力をもつたろからであります。ヨーロッパは起ち上るでしょう。世界は眠りから、無感覺の敗北から、幻滅から起ち上るでしょう。世界再造の希望があるとなれば、これが唯一のそれであります。

「人は神に支配されねばならない。そうでないと暴君に統治されるであらう」あの偉大なアメリカ人ウイリヤム・ベンはそういいました。

それは新しい日であります。新しい道であります。

この演説は、同年七月廿六日ユタ州選出上院議員E・D・トマス氏によつて議會議事録の中に讀み入れられた。

すべての主義イイズムに對する答

——物質主義マテリアリズムをも含めて——

一九四八年六月四日、M R A十周年世界大會に際し

ハリウッド・ボールからの國際放送

いたる處で人々は心から平和を求めつつ、一方において戦争の準備をすすめている。人々は再建を志しながら、破壊に具えている。彼らは新しい繁榮を計畫しつつ、新しく災難の起ることを豫期している。

今日の世界の計畫と經綸とに忘れられているものは、一體、何でありましょう。伶俐な人物、立派な計畫、善意など、そろつていながら、國際會議は何らの解決に到達し得ないでいます。

悲劇的ともいえる缺陷はデモクラシーを裏づけるイデオロギーをしかと把握していないことでもあります。我々は民主主義者デモクラツトであるからイデオロギーなどはいらないという。イデオロギーを云

云することすら何か弱味を見せるかのように思つてゐるのです。

その結果、我々はデモクラシーと相背馳するイデオロギーのもつ結合された計畫、および熱情に對して、わずかに口さきだけで高邁な理想を唱えるだけで終つてゐるではありませんか。しかも窮極においては武力に頼ろうとしてゐます。そして今までどおりの生活——身勝手な、安逸な、氣樂な生活をつづけようとしてゐるのです。

我々はあまりにも長い間、安全、繁榮、安樂、文化の恩恵などというものが、人間に自然に與えられるものだと思ひ込んで來ました。我々は善と惡との不斷の戦いを忘れてゐる。善の勝利によつてのみ安全と繁榮がもたらせられ、この戦いに敗北することはおろか、この戦いに無關心でゐることすら、貧困と、飢えと、奴隸状態と、死とを招來するのです。

善と惡とのこの戦いのあることを忘れた國々、すなわち神を忘れた國々は自由を失いました。中にはこの戦いを忘れこそはしなかつたけれども、逆に惡の支配に身を委ねた國もあります。

人類の歴史を通じて神と惡とは常に四つに取組んで來ました。惡を根治するためには外交手腕だけでは足りません。神のために戦うことは口さきだけでは足りません。政治家は解決の道を口

にします。統一融和を口にします。しかし分裂は増すばかりです。彼らは道義的なものの價值について論じますが、政策には不道義的なことが蔓延しているではありませんか。彼らは時の推移がすでに證明しつくした事實を語りはしますが、あくまで言葉として終つてゐるのは何故でしょう。彼らは自分たち個人の生活においても、國家としても、答を得るために當然支拂わなければならぬ代償を拂おうとしないからです。

激烈な惡の力に對抗するには、同じように激烈な善を追究する力より他にありません。狂信的といえるほど強い惡への追従に對するには、熱情的な善への追究あるのみです。

今日の世界においてデモクラシーが次々と敗北を喫する所以もまたここにあります。情熱に對處できるものは情熱以外にはないのです。兩立しないイデオロギーによつて分割された世界を救うものは、世界を一つに包含できる、より優れたイデオロギーあるのみです。

我々米國人は、イズムの戦いはすべて海の向う側に屬してゐるのだというような偽りの安全感にひたつてゐるようです。イズムというものは、人々および國々に解決されないうままに問題が残されるときに起きて來るものです。一人の人の心の中に残されてゐる憎しみの感情は、百萬の憎

しみをかりたてます。一人の人の猜疑心は百萬の猜疑となつて爆發します。ちようど野火のように燃え擴がり、時としては地下火のように潜行して豫期せぬ數百カ處から噴出することもありません。

アメリカは果して憎しみ、恐れ、猜疑、貪慾から自由でありましょうか。

アメリカの離婚率は何故こゝも高いのでしょうか。産業界の鬭争はどうでしょうか。よもや、あらゆるイズムの中でも最も大なるイズム、すなわちマテリアリズム（物質主義）に食われているのではないのでしょうか。

物質主義こそ、あらゆるイズムの母ではないのでしょうか。物質主義はアメリカの國民一般のイデオロギーになりつつはないのでしょうか。そのためにアメリカは世界に對する正しい責任を全うできないでいるのでしょうか。

我々はヨーロッパやアジアに經濟的援助の手をさしのべています。しかし物質主義は我々の最良の意圖をさえ失敗に歸せしめるのです。物價が暴騰し、貨幣價值は下りつつあります。産業界の相剋は生産の減退を來しています。外國援助のためアメリカの力が最も必要とされるときに我

我は今までに見たことのないような危機に直面することになるのではないでしようか。

これこそ我々自身の生活を跛にするイズムの働きなのです。そしてそれはアメリカをして人道のために働くのを妨害する第五列のごとき働きをなすもので、すべての國內未解決のまま残されている問題から起きて來るのです。

他のイズムはこうなるのを待つてゐるのです。待機してゐます。彼らは金錢のみではヨーロッパを救ふことのできないことを知つてゐます。食糧と衣料だけでも救えないことも知つてゐます。物質というものは、彼らがイデオロギー的に世界征覇にのり出すときに役立つ程度に、國々を物質的に強くするものだということも知つてゐます。

十年前にM R Aは生れました。そのとき、ここハリウッド・ボールに人々は新世界秩序の試寫會プレッセンを見ようと集會しました。當時も今と同じく、戦争の危険を人々は感じてゐました。そして當時も今と同じく、その意思さえあれば新しい世界を創り出す力は人々の心の中にあつたのです。

この十年間に我々は何を學んだでしょう。我々はイデオロギーをもたないデモクラシーは武力戦には勝ち得ても平和を打ち樹てることはできないということを學びました。またイデオロギー

的構えこそ國を擧げて行わなければならないことも學びました。これこそ道義的、軍事的、經濟的觀點からしても、國力の唯一の確實な基礎でもあるのです。

今日、M R Aは民主主義國家および全世界に一つの優れたイデオロギーを武器として提供していません。これなくして軍備もその効を失い、政治家も力を失うであります。

M R Aは過去十年の間に、物質主義をも含み、あらゆるイズムへの答として世界的になりました。M R Aによつて家庭を守り、名譽を全うし得た人は百萬を超えています。また幾百萬の人々の心を捉えて新しい世界に對する希望を與えました。しかもこの希望を實現せしめるため、各國内に生きた有機體をつくつて來ました。英國のある炭坑夫の言葉を借りていいますと、「M R Aこそ、かつて發明されたあらゆるイズムに對する答です」それはあらゆる場所のすべての人のものなのです。

過去一年間に立證された事實を少し述べてみましょう。スイスのコーで開かれたM R A世界大會に百五十人の指導的立場にいるドイツ人が來ました。これはベルリンにいる米國のクレイ將軍とロンドンのバケナム卿との肝入りの結果であります。これらのドイツ人たちは虚無主義ニヒリズムおよび

思想的に打ちひしがれた國民への答を見出したのです。ある地區總理大臣は「これこそ我々の唯一の希望だ」といいました。またコロンの軍政長官である連合軍側の一將校は「MRAはドイツにとつて理想的な解答だ」ともいいました。前地區總理で有名なドイツの社會黨員の一人は「ヨーロッパを救うとなればMRAの精神をもつてせねばならぬ」といつています。

これらのドイツ人の手で戦後初めてドイツに對する答をもつ民主主義的イデオロギーを伝えるパンフレットが書かれたのです。これは鐵のカーテンの後方にまで撒布されています。スウェーデンはこのパンフレットを印刷するために百トンの紙を提供しました。というのもこの新しい精神がドイツに興ることこそ自國の安全だと感じたからであります。

フランスの産業界——ここ數年間、イデオロギーの戰場となつてこの産業界は、統合できる力をMRAに見出しています。六千萬人の労働者を擁する、ある經營者團體の責任者で長年反勞の旗印を高くかかっていた男がいます。一方、フランス社會黨の婦人部長で經營側を猜疑心をもつて見守っていた婦人がいますが、この二人はこの度、新しく戦わなければならないものを見出したのです。それはデモクラシーを活かす靈感にふれたイデオロギーのための戦いです。二人

は會見し、ともに改變し、互いに陳謝しました。そして今、肩を並べて働いています。數千人が彼らの下に集つて來ます。彼らは、もはや革命を語らず、反動的言辭をも弄さない。彼らの語るところは精神復興です。すなわち國の生れ變り、全大陸の生れ變りです。

イタリヤをとつて見ましよう。世界は愁わしげにこの國を見えています。昨年夏、M R Aの會議に二十六名の國會議員を含む二百名のイタリヤ人が來ました。彼らは五つの異つた政黨を代表していました。キリスト教民主黨員と社會黨員とが協調して働くことを覺えたのでした。社會黨員の一人がいました。「こうしてここに我々が一緒にいることがすでに不思議である。我々同志が協調できたと同じ精神で我々の黨も同調できるであろう」これはイタリヤの選挙のかけにかくれた一つの秘話といえましようか。ヨーロッパの將來を導く善い道でありましようか。

イギリス——生産は高まりつつあります。しかし、イギリスの最大問題は何でしよう。M R Aが入つていつたある炭坑地區の經營側の一人がいました。「M R Aは我々の空虚を満たし、必要としている推進力を與えてくれる」一九三六年に英國産業博覽會がバーミンガムで開かれたとき、M R Aは大きな集會を催しましたが、(四三頁参照) そのときイギリス自動車工業界の重

鎮ナツフィールド卿はメッセージを送り、その中に次のように述べています。「我々が熱望している幸福を得たいならば、まず現代我々に覆いかぶさつて來ている人爲的な諸問題に直面する覺悟がなければならぬ。これに直面し、これに解決を與える道は、我々の個人的生活においても、家庭においても、また産業においても眞理と、誠實と、無私の精神を全面的に導入し、しかし相手側の見解や悩みに思いやりのある理解をもたねばならないであらう。」

以上述べた明朗なニュースに共通しているものは何でありましょう。融和です。これは現代の困難な諸問題の解決に大方忘れられているものです。

分裂は現代の特徴です。心の中も分裂しています。家庭も分裂しています。産業も、國內も分裂していれば、國と國の間も分裂があります。

融和こそ即時必要事であります。

分裂は人間の傲り、憎しみ、執念、恐れ、貪慾の所産であります。

分裂は物質主義の商標です。

融和は新生をとおして得られる恵みです。我々は改變と新生の秘訣を忘れたがために融和の術

を失つたといえます。

我々は融和できる共通點を見出そうと努めはしますが無爲に終つています。我々は政治に、産業に求めて得られないが故に希望を失うのですが、求め得られる唯一の箇所を見逃しています。それはすべてを抱擁し得るイデオロギーにおいて見出されるのであります。アメリカにおいて物質主義が残している足跡の一つはこのことであります。我々は世界を再び結合させ得るようなイデオロギー、すべてを覆いつくすイデオロギーを創り出し、生活する力を失つているのです。

M R Aこそは萬人がみな融和し得る神に指し示されたところの善い道であります。

カトリック教徒も、ユダヤ教徒も、新教徒も、ヒンズー教徒も、モスレム教徒も、佛教徒も、儒教徒も、みながこの善い道において融和できるのであります。みな、ともどもに歩める道です。相互の懸隔を超越して、より優れたイデオロギーの高い面に引き上げられるでしょう。

私は、ある偉大な精神界の指導者が悲嘆にくれておられるときに尋ねたことがあります。その人は今夜ここに來ておられます。彼はそのとき、フルトン・シーンの次の言葉を引用して話されました。「現代の世界の必要事は異つた宗派間の融和を願うことより宗教心のある人々の間に

融和をもち來らすことである」これは有名なカトリック教徒の言葉であります。

ユダヤ人は偉大なる預言者イザヤの言葉を通じて貢献をしています。すなわち「主なる神の故に國々は汝に來らん」また「汝の子供らの平安は大ならん」詩篇をひもといてごらん下さい。

「汝の律法を愛する者には大なる平安あらん。彼らを侵し得る者なかるべし」

回教徒は何といつていますか。パキスタンの外相ザフルラー・カーン卿は次の言葉を送つて來ています。「私はM R Aの友人の間に、この精神が現實に動いているのを見て嬉しく思うものです。彼らは神の計畫と目的とを斷えず求めようとして努め、またそれに則して生活しようとしています。私はこれこそ現下の世界の最必要事であるとの確信をもつておりますが、この方向に向つて眞面目に努力を持續することによつてのみ人類は眞の救いにいたるものと思ひます。」

パレスチナ問題を解決する道も、ここにあるのではないでしょうか。これらの大眞理も偏見のために見失われがちであります。世界の現状は「如何に兄弟互いに攻め合うかを見よ」と語つています。「如何に兄弟互いに愛し合う様を見よ」にしなければならぬのです。

世界の國々が必要としている最高の指導性を先入観で妨害させるべきではありません。

フィンランドのタンマフォールの監督がMRAの思想劇「忘れられたる要素」が自國において自國語で上演されるのを見に來ました。初め、彼はこのような偉大な眞理を傳える方法として劇を用いることに疑念をもつていたのですが、來て見て涙を流しました。「あらゆる人に見せるべきだ」といつて第一幕が終ると直ちに、ある有力な實業家を電話で呼んだのです。その結果、劇は一ヵ月間タンマフォールとその近郊に連續上演することになりました。

自國のために最も彼が望んでいたもの——すべてを抱擁するイデオロギー——を見出したときのビショップの喜びは如何ばかりであつたでしょう。しかも初めは氣がすすまないのを半ば無理に出かけて來たのに。

インドはどうでしょうか。ボンベイ地政府の労働大臣でインド労働界の大立物がスイスの世界大會に來ました。彼は次に述べる言葉をインド各界の指導者および労働大衆にもち歸つたのです。「わが國民の心と魂を蝕んでいる利己主義と貪慾とを變えることのできる力がここにある。MRAを知るまで、私は廣く誰にでも適應できる答があるとの確信をもたなかつた。」

ここカリフォルニアの労働者たちも同じことをいつています。彼らも解答としてもたらせられ

たこのイデオロギーによつて改變するということと、融和できるという大眞理をつかんだので
す。その結果、一團の労働者が経営者側に「善い道」^{グッド・ロード}の映畫化のために無報酬で働くと思出たの
です。私が頼んだものではありません。彼らの申出です。彼らとして果し得る大きな役割のあるこ
とに氣づき、進んで發議したのです。

これこそ我々の望む、より自由な世界ではないでしょうか。これこそ労働の尊嚴といえるので
はないでしょうか。

今日のストライキを考えてみましょう。ストライキは今日この頃なかなか盛んですね。七萬五
千人、否十萬人、人はあまり氣にもとめないようです。確かに大統領はこの國家大の反響がある
かもしれないといつています。經濟學者も警告しています。しかしそれがある一つのイズムの忍
び込む入口だと考える人がありますか。勞資双方、否、貴方と私の考え方、生き方が物質主義を
基準にしているからでしょうか。

他國を責めるそのことで、アメリカは自らを破滅に導いているようなことはないでしょうか。
フランス、イタリヤ、ポ・ヴァレーはどうですか。ストライキに對する解答を知つていてしよ

ろか。

映畫労働組合に屬しているこれらの人々は別の精神を發揮しました。彼らは決して、いつも經營者側にこのような提案をしはしません。しかし何という素晴らしいことでしょうか。これには大きな教訓が含まれています。そしてすべての人を、貴方さえも考えさせることです。

さて雇主側はどういつているでしょう。カリフォルニアのある大飛行機製造會社の代表者が私にいました。「M R A の働きを見るまで、私は物質主義に對するアシジの聖者フランススとともに死んでしまつたと思つていました」と。

一言いいたいことがあります。M R A のメッセージは決してすべての人に歓迎されるとは思つていません。それは良心を呼びさします。

氣持の悪いものです。逃げようとする人によつていつでも曲解されるでしょう。しかし準備されている人には光明として映するでしょう。

私がこのメッセージを受けたときのことを話して見ましょう。四十年前のことでしたが、私は自分自身の中において分裂してました。ちようど世界の國々が分裂しているように。私の心の

戦いにおいて物質主義が勝ちを制しようとしていました。私は逃避しようとしてヨーロッパへ行きました。心の中の戦いはどこまでもついて来ました。ある日、英國の湖水地方で、神は私の傲慢と物質主義のために支拂つてゐる代償を示し給いました。私はそれを認めました。それが第一歩です。正直になることです。

私はまず神に向つて、次に私の誤つてゐた人々に對して、陳謝しました。それが第二段階です。

私は神に聽くことを覺えたのでした。そして私は國々および人々の待ち望んでゐる答をもたらず使命を感じたのです。これが第三段階です。

神はあらゆる處にいるあらゆる人に向つて融和をもたらず器たるべく呼びかけておられます。融和は會議によつて、法律によつて、決意文によつてもち來らせるものではなく、改變を通じて與えられるものです。

改變こそこの優れたイデオロギーの眞髓であります。私に起つたこのことは、國にも起り得るのです。私のとつたと同じ簡単なことさえすれば、誰にでも新しい世紀の扉が開かれるというこ

とはM R A、神に示された精神の進展が立證しています。個人の改變を通じ、國家の生命に新しい息吹きが入るのです。

産業界、労働界、政界、宗教界等各界の指導者が改變すれば、國の政策は一變し、その國の生命の泉は再び流れ出すのであります。爲政家が改變すれば戦争の恐怖と混亂とは霧散するでしょう。最も頑固な人々でさえ、生れ變つたデモクラシーの謙虚な、しかし確固たる結合された聲には耳をかすでありましょう。

神とともにあれば精神復興ルネッサンスが必ず興えられるというのに、なぜ破局を來らせなければならぬのでしようか。

これこそ、すべての國に與えられている自由の新しい型であります。ヨーロッパおよび全世界は再び暗黒時代に閉ざされるでしょうか。あるいは最後の隣間に、人類に奇蹟のように道義的、精神的力が世界大のルネッサンスをもち來らすでしょうか。

どちらが來るべきでありますか、その決定權は貴方がたの掌中にあるのです。

答はあ　る

一九四九年六月四日、スイス、コー
のMRA大會からの國際放送

答はあるでしょうか。あります。

ドイツの黒い森シュワツツォルトを散歩していたある午後のことでしたが、神は語り給いました。「道義的、精神的ルネッサンス、道德再武装MRA」と。ここにこそ未來への希望があります。

MRAは百萬の足をもつようになりました。それは大衆のために必須のメッセージをもつてい
るのです。また爲政者の必要にも應じております。佛外相シューマン曰く、「今やヨーロッパ數
百萬の人々の生活にイデオロギー的内容をもたせねばならぬ。」

勤勞者たちも、世界にはすべての人の必要に應ずる物資は十分にあつても、すべての人の慾望

を満たすだけのものはないということに氣づいて來ています。

M R Aは東西を問わず、政變を通じて人々を結合させる偉大なる力をもつてゐるのです。それはあらゆる面での改變をもたらします。經濟的な變化、社會的な變化、國家的な變化、國際的な變化。しかもすべては個人の改變を基礎としてゐるのです。M R Aは國の運命でさえ變え得るような個人の見解を生み出すのです。世界を再造し得るほどの力をもつてゐます。國と國とを融和させる道を示すと同時に、家庭においても、産業においても、政治においても、國においても靈感にふれたデモクラシーを創り出すのです。國としての反省と、生命を得るような素晴らしい生き方をさせるのです。M R Aは神の心を心としてゐます。

ドイツを例にとりましょう。地區總理たちはM R Aの精神を政治にとり入れようとしてゐます。北ライン、ウエストフェリヤ地區總理カール・ブーノルド博士は次のようにいつてゐます。「一つのイデオロギーに答を得るものは、より優れたイデオロギーしかない。ドイツは新しく發足したデモクラシーを裏づけるような優れたイデオロギーを必要としてゐる。M R Aは新しいヨーロッパに通ずる精神的な道である。私の内閣においては、すでにこのイデオロギーの成果を收

めつつある。このイデオロギーこそは、我々の國に必要な道義的、精神的な救治をもたらし、かつ他國との間に平和を保つ眞の基礎となり得るものである。世界の各國が確信と熱意をもつて善き道を求めるときに世界は新發足をなすであろうと私は信じている。」

彼の同僚、バヴァリア地區の前總理エハード氏は、この言葉に呼應して次のようにいつています。「世界はこのようになり得るし、なるべきであり、ならせねばならない。」

これはあらゆる處のすべての人のために効き目があります。人々は安全を願つています。すなわち、憎しみなき、恐れなき、怒なき世界を願つています。が、それが人間性は變ることができないと思うところが隘路なのです。しかし、人間性は事實、變ることができるので。そして國の性質も變れるのです。

新しい人々、新しい國々、新しい世界を來らすための戦いに、我々は適當な武器を必要とします。「善き道」や「忘れられたる要素」という二つの劇は、諸國においてその國々の言葉で何千の人々に呼びかけていますが、これが映畫化された際には何百萬の人々に話かけることになるでしょう。神から與えられたこの思想の侵し難さに人々は敬服しています。パーデン・パーデンで

この劇が上演されたとき、一人のドイツのマルキストはこういいました。「あたかも長い山道を登り終えて、突然、光の都を見たような感じでした。」

ドイツ占領に當つてゐる、あるフランスの役人は次のようにいつています。「この劇は私を壓倒してしまつた。四年前にこの劇が上演されていたなら獨佛間に横たわる問題はなくなつていたであらう。私は私自身の生活および私の施政にこの精神を活かしてゆく決心である。」

有名なカトリック思想家ラインホルド・シュナイダーはいう。「これこそ世界の隅々にまで行きわたらべきである。」

ドイツの産業界の反響はどうでしょう。ドイツ石炭廳長官コスト博士は、ルール地方の工業界にM.R.A.の精神をとり入れることを計畫すべく、百五十人の同地方の産業人を集めました。ある人をして、もしも一發の爆弾を、みなを集つてゐるこの部屋に落したら、ルール地方の産業は停止してしまうだろうといわしめたほど、産業の重臣が集つて來ました。この集會に十數カ國からの産業界や、勞組の指導者たちが話したのでしたが、コスト博士が次のごとくいつて、全體の基調を示しました。「勞働側の改變チェンジを待つべきではない。改變こそは我々に要求されているもので

す。我々が變るか變らないかを決めるのはすでに問題ではなく、如何に變るべきかが問題なので
す。」

ドイツの英國占領地區の勞組會長、ハンス・ポークラー博士もこの會議に出席していました。彼の曰く、「人々が過去や、時代おくれのものなら解放されたいと望むなら新しい目標をもつべきである。これは人類愛と道義的價値をすべてに先行させるとき初めて可能となるのである。私はM R Aが人間生活の幾多の面において確定的な改善をもたらすことを信ずるものである。人々が改善するとき、社會機構が變るのである。社會機構がこうして變れば、また人々の改變を來すのである。兩者は相俟つものであり、ともに行われることが必要である。私が組合員として全力を傾注して來らせようとしている目標と、M R Aのそれとは合致するものである。」

我々はすでに二十世紀の半ばに達しました。後半の鐘をにぎるものは誰ですか。それは虚無主義と無關心とに解答をもつ青年のいる國ではないでしょうか。

ハイデルベルヒ大學新聞を編集しているある學生のいうには、「我々學生は行詰まつている。M R Aだけが解答をもたらせるものである。」

「忘れられたる要素」はボン市において上演されました。そのときカトリック僧侶であるボン大学の總長は立つて祝辭を述べたのですが、その中で彼は次のようにいつています。「十三世紀の危機にアシジの聖者フランシスのなしたことをMRAはより大なる現代の危機に對してなしている」彼はボン大学の學生が多數MRAに呼應している事實に鑑み、スイスのコーに来ることになりました。

フライブルグ市でこの劇が上演されたとき、切符は全部賣切れていたにも拘らず學生が一人來て必死で入場させてくれと懇願したことがあります。彼はソ連地區から來ていて次の朝には戻らなければならぬと語り、さらに「東部ドイツではみなMRAのことを話しています。はつきりしたことは分らないのですが、何か我々の唯一の希望だといつています。私は友人たちにはつきり正體を擱んで來いといわれて來ました。歸る前にどうしてもこの目で見なくては歸れません。」

誰もがMRAこそドイツに對する答であると感じて居るのです。しかし逆に生れ變つたドイツがすべての人に對する答をもつことになるかと氣づいて居る人は少ない。ところがドイツの運命は

ヨーロッパの運命を決します。

ベルリン大學法學部教授ベーター博士は「ドイツ民主主義の諸問題」と題する近著の中で歴史をおして見られる民主主義の七つの型に言及し、さらに、現代の民主主義の失敗に對してMRAのいう靈感にふれた民主主義こそ答であると結論しております。

十七萬の組合員を擁するベルリンの勞組會長は曰く、「常に正しいことをなすことができる心の平和は如何にして發見できるだろうか。MRAを推進させるために多くの使徒を必要とするでしょう。私もその一人になります。MRAのメッセージは潮風のごとく人類に與えられつつあります。」

またパリのためにも解答があるでしょうか。MRAの他に答があるでしょうか。

ドイツのある社會主義者はこういつています。「MRAなしにはヨーロッパの結合はできないであろう。」

前フランス社會黨婦人部長ロール夫人に聞いてみましょう。「私はドイツ人を憎む十分の理由をもつてコーに來ました。しかし奇蹟が起りました。MRAを生活に活かしているドイツ人に會

つたとき私の憎しみは消え去りました。第一次と第二次大戦の中間期間にドイツとフランス兩國に如何なる感傷主義センチメンタリズムももたらし得なかつたことを、このお互いに共通のイデオロギーが達成しつてあります。今や兩國ともに眞摯に理解の橋わたしをしようと努力できる確固とした地盤を得ました。」

ニュージーランド副首相ウォルター・ナッシュ氏は地球の裏側からこれらの言葉に呼應しています。「MRAは人と人との間に、雇主と従業員の間、政府と政府の間に新しい関係をもたらしています。MRAの仕事は廣く行われなければならない。現代世界において最も強い力であります。この仕事の達成の遲速は擧げて我々の責務である。」

人と人が協調して働き出すとき、國は新しい精神に生きるのです。多人数を要しません。例を擧げてみましょう。東洋で起つたことです。ビルマのラングーン市の一新聞、「バーマン紙」に次のような見出しが出ました。「國家大の精神的進行、吾人はあらゆる偏見、派別的思考、利己心に打克つ、より高度の考え方を要する。」

この見出しのかけにどんなことがあるといえ、ビルマの國難に際し數人の指導的地位にある

人々が協力してM R Aの松明を高く掲げたのです。彼らは次のごとく全國に呼びかけました。「現在まで何らの解答を見出し得ずにした理由は、解答のあるべき箇處にこれを求めていないためであつた。ビルマは借款を必要とする。財力が必要だ。殆んどすべてが足りない状態であることは事實だ。しかしここに必要缺くべからざるものがある。それは人を改變できる思想である。すなわち相互の信頼感を助長させ~~る~~べく心を變^ハえることである。その後初めて相手に望む生活を自分自身が生活し始めることになる。そのとき初めて我らは己れの信ずるところに従つて生き始めるのである。」

政治に導入されるべき新機軸はこれでありましょうか。コーの大會に出席すべく、バーマン紙の主筆と總理大臣とがすでに途上にあるのもこれと關聯しているでしょうか。

政治家が利己心を離れて指導すれば國民はついてゆくものです。中國の何應欽將軍は私に送つて來たメッセージの中で道義的節操だけは固持するといつています。私達の國は節操を守ろうとしていきましょうか。それとも便宜主義に惰しているでしょうか。

インドもM R Aに答えています。ボンベイ政府の勞働大臣ナンダ氏は國民に一つの誓約をしま

したが、その中には次の言葉が含まれています。「個人におけると同じく、國家にあつても愛、純潔、無私、正直等の徳にかかつている。」

「M R Aは憎しみに對する解答をもつてゐる」とマルキストはいつています。白人に對する憎しみを私の心からとり除いたのもM R Aです」とジャマイカの歌手バイルス氏はいいます。

なぜM R Aが解答であるといえ、根本を救治するからです。

あるアメリカ中部の百姓がいうのに、「私は舊譯聖書を讀む度に、なぜ神さまは人々に語るのをやめなかつたのかと不思議に思つたものでしたが、M R Aを知つて、やめたのは神さまの方じやなくて、人間が聽くのをやめたのだということがわかりましたヨ。」

ある人の言によれば、現代人は己れの罪に無頓着であるが、無頓着であるために、その結果として己れの罪以外の殆んどすべてのものにわすらわされているではないか。

M R Aは罪ということを眞面目に検討します。キリストを眞面目に考えるのです。ドイツのウルム監督は次のように書いています。「M R Aでは人々はキリストの十字架をあまり口にこそ出さないが、彼らはその力によつて生活している。その影響が強く感じられている。彼らが黨派

を、國々を、異宗派同志を結合し得るのもそのためである。」

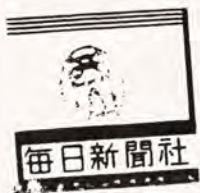
グラスゴウの前市長でカトリック信者のドーラン卿は曰く、「崩壊途上の文明にとって唯一の確かな希望である。」

労働運動家の一人曰く、「M R Aは何も新しい組合ではない。新しい宗教でもない。かといつて新政黨でもない。新しい世界を實現するため、人々に共通な戦いにおける救いである。」

答はあるでしょうか。あります。

今、我々が必要としているのは、「よし、やろう」と誓う大衆だけではありません。

世界を再造する



昭和二十五年三月十日初版
昭和二十五年六月十日再版

定價 一五〇圓

著者 フランク・ブックマン

譯者 相馬雪香
西山千

發行者 東京都千代田區有樂町毎日新聞社
尾崎昇

印刷所 東京都板橋區志村町五番地
凸版印刷株式會社

東京都有樂町・大阪市堂島
門司市清瀧町

發行所 毎日新聞社

